

古史傳

自第九十四段
至第九十八段

十九

和書門			
二〇	二六	二九	三一
二	五	三	一
册	架	函	號

內閣文庫			
二〇	二六	二九	三一
二	五	三	一
架	册	號	類

內閣文庫	
番號	和 20261
冊數	22 (19)
函號	140 183



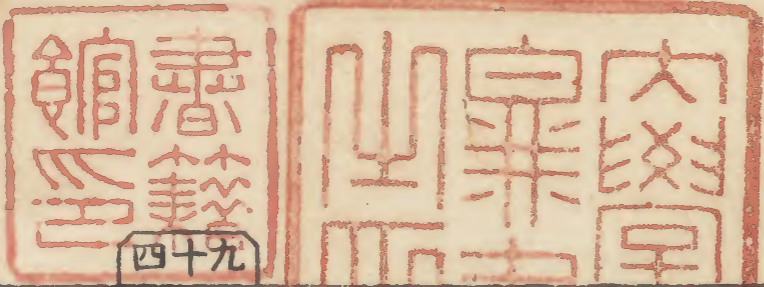
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





古史傳十九上卷

神代中十一之卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

淺草文庫

續攷

爾大國主神謂少毘古那神曰

吾等所造出國豈謂善成出乎

詔則少毘古那神答曰或有所

ナセトコロアルハアリトザルナサトコロキソノノチスクナヒ
成處。或有不成處焉。其後少日
子命者。到坐伯耆國粟島。時粟
而。莠實出時。載其莖。見彈而渡
坐常世國矣。故其地云粟島。此
二柱神坐出。所謂志都岩屋者。

アリイハミノクニニ
在石見國也。

吾等所造之國とは。二柱神心を一び力を勦せて造給子
依此大御國を詔へ。○豈謂善成之乎とは。年まねく造
巡正給々むぐ。猶未成竟とゆとは。謂難く。造竟ざる地を
猶多の正を。聊倦思ひ給子依趣小聞也。依御語お。○或
有所成處。或有不成處とは。然を詔子ども。稍成せ依處も
の正未り。於て成ざる處も有。と詔へ依ふ。所成處とは。
此大御國を詔ひ。不成處を。諸外國を詔子正を。通也。
然るは少毘古那神。前ふ其外國を。獨して造巡給ひけ

む。御国子渡り來坐る故。諸外国の成ざゆ事を知看
ま坐まり故。彼国に不成ナラザレ比クばて。大御国は所成ナセル
處ト。と詔す。依意ナ依レべし。古來の注者とち此の二柱、神代御語の意を説得とる
一人トどモ有ルおとれし。然レ本書。此下文小。是談也蓋有ル
幽深之致ナ焉也有ル。撰者此文ナ依ル。大古の傳書を採て
載ルるヨ。是談は。殊ニ幽深カき致有ルげハ聞ル也依傳ナら。
其意を思ひ得テ。如此ク驚カくシ置キるハ。信ス幽キ旨
の依御語ハぞ有ル依。舊き注者とちの説。此を以て敬讓、立教ありと云ひ大己貴神功小誇
る意ある故。少ニ毘古那神直ト言ヲ以テ諫ル。躬ヲ退キ
て諫ト依レ記者の賛セる辞ナ也ハ云ル。漢説よハ辺
於ラへル腐説。依レ更ニも言ハ。交岡部翁ハハおハ好事
此者の附會ナり。神代の直キ傳説ハ。何ぞ幽深ノ事ハ有

むと言れ。於まど。此に餘ニある語あり。直キ神代ノ傳説ハ。まど事毎幽深ノ致ハらズ也ハ物字也。○其
後ニ也。既ニ小国ト作リ。竟テ後ニ也。云フ。予ハ如ク聞ル也ハ。れド也。次ニ語
ふ。大御主ノ神愁而テ詔ク曰ク。吾獨而何能得作ス此國也有をモて
見ス也。然レもハ非ズ。猶作也ハ給フ程ノ事ハ有ルを。其初於方
は。相立て作給シを。後於方ハ至テは。と云フ意ハ也。○粟嶋
也。伯耆國風土記ハ。相見ル郡郡家ハ西北ニ有ル餘戸里ハ。有ル粟嶋ハ。少
日子ノ命時粟莠實離。即チ載リ。粟彈渡常世國故云。粟嶋也と
見え。神代紀ハ。一傳ふモ。至リ淡嶋而緣粟莖者則彈渡而至常
世鄉矣と也。淡ニ粟ノ借字あり。伊邪那岐伊邪那美神
也ハ。初ニ生給へル淡嶋ハ也ハ。非ズ。思ヒ混フ
あル也ハ誤ナり。まど古事記ナり。たハ。度于常世國也ハの

み有るを
精うらび
○莠實之時也。與久美能禮留時邇と訓法し。但
此を師訓
○載其莖云くハ。莠實れる莖此はきふ載也。
採絶て。其莖の起返るはぢみふ。彈のまて渡。給子依由あ
る法し。太平記よ。資朝卿の若子阿新殿此本間が館を逃
給ふ処ふ。堀を飛越むと云る。口二丈濶一丈
ふ餘。とる堀あまむ。超べき様も無りけ也。けらむ是を橋
よして渡さむと。思ひて堀此上よ末靡きとる。吳竹の
梢ふさらく。登とれむ。竹の末。堀此向。予靡き臥て。安
安や堀をバ超て。り。と云るも。稍似とる。意むへあ也。但
志彼を靡て。超え。此を靡けと依
莖此起るよ。彈うれて渡。坐依あ也。○常世因ハ。師云凡て
上代ふ。常世と云ふ三あ也。一は常世。長鳴鳥。常世思兼
神あどある是あゆ。あを常夜此義あると。上ふ云依ぐ
如し。第五十四段の二ふは雄畧天皇の大御歌よ。麻比須
傳見るべし。

流袁美那。登許余爾母加母。垂仁天皇卷ふ。伊勢因則常世
之浪。重浪歸因也。顯宗天皇此室壽御詞よ。拍上賜吾常世
等万葉一ふ。我因者常世爾成年。おれらあ也。此を字此如
く。常石よして不變あとを云也。三ふを常世因と云ふ是
あ也。右此三其言を同じけまども。其意は各異ふして。相
關らび。三を同意よ心得るを。字の同じきよ迷ひて。深く
借て。常世と。考ざるものあり。言此同じき。字を相通をし
書るあゆ。けて常世因とを。如此名けとる因の。一あ依
ふは非也。あ。何方よまれ。此皇因を遙ふ隔也。離れて。あ
やま。往還が。死處を。汎く云名あ也。故常世ハ借字ふ
て。名義ハ底依因よて。あ。絶遠き因れる由あ也。古よ曾
許を登

許と通たし云るおとまと曾許とを下此み非或四方
上下何方より遠くも至りて極まる処を云ことま
と万葉乃天雲乃遠隔乃極遠難跡裳おと云依曾伎聞も
同言あることおと委く天之常立神の処よ云るが如し
○今云第二段の傳よ凡て上代よ常世因と云依を皆此
注せり合せ見るべし
意此外おし御毛沼命者跳波穗渡坐于常世因を見え
此事神武天皇多遲麻毛理遣常世因云くと見え
仁天皇卷よはと常よ歌尔雁の還往處を云おと皆是
見えと云
巴まふ後ふた人此死るを常世因よ往と云し事あり
は極死て遠き所よて便もあく往來こども叶を燃意よ
て右此意を轉しと依め此也
至於大漸これら其意あり大漸を訓るを字義よを當ら
固黄泉乃界丹云く書紀よ雄畧天皇の遺詔よ不謂遺疾
行莫因云く九よ遠津

祐ども訓の意を崩坐て常世因よ罷坐むと云事あり
て變らば死交万よ死てと死因を常世因せ云る事あり
是は漢籍おとよ依おと多き世よおとて彼謂も依蓬萊
おどの説よ依て此方よ云來れる遙けき因をいふ其名
を借よ依物あり
小謂も登許余と云云は有て其名まで相叶へ依故
とを常世因よ是よ似とる牙ふはと常石よ不変こ
みかまこれ以て附會よ依ものあり然るを後世人を
み思ひて上代の意を深く考へざる故よ不変不死を常
世因の本義よと心得居るを非あり不変不死此意よ云
尔万葉四よ吾妹兒者常世因尔住家良志昔見從若益
江浦島子哥よ常代尔至云く老麻越等貴不可忘九よ詠水
有家留物乎云くこれらあり書紀雄畧卷よ此浦島子

事を到蓬萊山とあるを彼紀の癖として万、小漢をま
と依るまむ也。然此文おと迷ひて常世、固を蓬萊の事
とれ思ひ誤りそまよ垂仁、卷小彼、田道間守が言よ是常
世、固則神仙、秘區云く此語も後世此漢籍の蓬來此事
ぞを思ひて書添られとる潤色の文おして更の上代此
言よ何ら凡て書紀を如此き文よりて古の意を失
らば多り。知ちて右小云る如く常世、固とは何處小ま
ま遠く海を渡りむ往く固を云おまむ。皇固の外を万、固
みお常世、固お也。斯て此少毘古那命は御祖神皇產靈神
此御手候とり漏去坐おる神よて前此御語お依る小其
行方も知らま給はざ也し趣お也。ちるは此葦原中、固よ
は降坐おして外、固お放往坐しぐ故お也。久伎よ漏字
を書き書紀お
漏墮とある墮も此意よて書れと依めのあり大名半
遲神の事お自木、候漏逃而去とあるをも思ふ也し

て前小海を也依來坐依也。外、固を也渡來坐る小て此小
渡、坐常世、固とあるはまよ外、固お還坐依あり。ちる息長
帶比賣命の御歌お常世よ坐と何れむ。後まで外、固お鎮
座お也。然れむ此神を初高天原よして御祖命の御手候
とり。放去て降坐しれ也。永く外、固お坐神よて其間よ少
時皇固よを渡來坐おる事何也しれり。ちる此趣お據て。
今おらく按小外、固を皆本。此神の經營堅成ぬ万、固
物ある也。し。三韓及漢天竺その他餘も四方此万、固の初を
みお書紀小津沫の凝て成れる者とある其
内、外、固を也。此事既よ上り云り然ありて後よ此少毘古
那神の降坐て何の固をもみお經營給へ依あるべし其
早晩勝劣おと此異こそ有也れ悉く此神の經營給へ
る小漏とる固を有べりらば其を人代此命此長さを以

て計ると死に因る此神の經營給予ると云ては時代合
は安んじ思ふ人有るは此神の壽命年數をこ
をやく久しく長らむは遙か前代をわたりて國を
伏義航とくは非ざる天をり降りて經營給へりし事
て疑ふなき此神の天をり降りて經營給へりし事
此神の御名を以て不此の祟記りて傳へる語は
異ふも知ざる國の天をり降りて經營給へりし事
はくはと其神靈を以て不此の祟記りて傳へる語は
何れの國にも正しき事を知らず在りて抑今如
此言を聞む人も思ふ事を知るに餘りて何れも
外國の説を信ず人も思ふ事を知るに餘りて何れも
はくはと其神靈を以て不此の祟記りて傳へる語は
人々此事を心得居るは物學びせむかくて後世小至
て其諸の外國を正しくの事め物も渡參來て其を
用ふゆゑと多死に此神代ふ此神は外國を正しく

渡來坐て大名牟遲神を助けて諸共經營成し給予め
志趣と全符合すいぞ深き理あゆ事あるはし故外國を
於る事物の中におも皇國の助けとあり室とあり
又害とある事も多し是を自然あるべき趣あり少
那神を最惡而不順教養と御祖命の詔ひて初惡り
神も坐せばもえら此神は經營給予外圍く元より
き事多うゆべき理あるをさまど惡きより善きを
以理をもはと思ふは物ぞり○今云方の外圍く
經營成せる神は師説の如く信ふ此神は始あるべき
し外圍くをり事物は渡參來ること此神は掌給ふ
非玄須佐之男大神の荒魂五十猛神亦名を韓神の專
掌給ふこと上第六十七段よ委く注せるを合考べし
まも此少毘古那神は去坐る程お大圍主神は魂大物
主神も外圍へ渡り坐り聞え其後大圍主神の御子
十五神を四方圍ひ遣し給ひま後大圍主神の御子
往來坐りと聞ゆ其は第九十五段第百三段お注を
見て知べし○神は凡て其圍其人の便利ゆる事を
あめて其を諸方の不便ある方おとして普く人を

用と為給ふ。○此二柱神坐之云々は。万葉三ふ。大汝小彦
名乃將座志都乃石室者。幾代將經とあるよ依て記せ也。
此石室は石見国ふ在。ことまは其国入小篠御野が言ふ。
邑知郡岩屋村と云ふ。いぞ大ある岩屋あり。里人を志都
岩屋といふ。出雲備後の堺ふ近き處ふて。濱田とゆ。二十
里あり也。東方ある。最山深地あり。此岩屋の高さ三
十五六間あり。大岩屋あり。古大汝小彦名二神此住給へ
依岩屋あり也。里人語り傳ふとゆ。まは其近き辺も大
あり。即此辺を濱田の主此領地。ちて古はやがて此石
屋を祭也。しふ。中頃とて其外ふ別ふ社を立て祭る。志津

權現と申は。と云ふ也。此も師の王勝間ふ見えたり。まは
人よ聞る由りて。此と同じ説を挙て。極山中辺鄙あり。まは
万葉の哥ふりて。附會はべき所。非也。此岩屋出雲備
後此堺ふ近き所あり。と云ふ。是や。家志都此石室あり
らむ。風土記ふ出ると。飢郡志都。徑といふ。地此方角あり
叶を。怒もや。とく。其国入ふ。尋ぬべし。や云へり。さて記傳
ふ。此哥と同卷あり。皮為酢。亦久米能。若子我伊座家流。三
穂乃岩室者。雖見不飽。鴨とある。哥とを引て。此二首の三
穂の岩室と。志都石室と。錯乱とある。ふて。大汝少彦名。二神
此座し。三穂石室ふて。紀伊国ありし。と言れし。を久老
其説を誤あり。やて論へること。三卷の別記ふ載し。此論
多書て。本居氏ふ見せと。る。是を己が初。此考ふて。あひ
言ふて。あり。死せ云りと。有。然れば。記傳ある説を。取ぐ
し。はと。国入竹内。正業言ふ。邑知郡出羽。庄岩屋村。ふ。深き
岩屋此ある。ふ。大名持少彦名。神を祭也。て。靜權現社と稱
す。ども。岩屋こそ古けき。此も志都石室と云ふ。古老ふ尋

終るふ後の事なり。案此靜岩室ハ、安濃郡靜間村の魚津
と云處ありて。里人を千疊敷といふ。廣き石室あり。靜
村を和名抄ふ。安濃郡よ。古老を。是ぞ案の靜石室あり。大
靜間、郷ありて是あり。古老を。是ぞ案の靜石室あり。大
名持少毘古那神の住坐依處ありて。崇むる事なり。案
然も有はきは。此岩室を五町ばりゆ放きて。乗水と云
處ふ。式ある靜間神社ありて。祭神を。大名持少彦名命あ
り。往昔は。此石室に傍ふ在しを。古く此邊を領とてし人
に。勢徳あはれに任せ。乗水よ移せと云傳ふまはれり。
但しそを何頃と云こと知べき由あり。安濃郡は出雲、因
神門、郡と相隣りて。水臣津野命の堅立給へる。其河の化
まりや。云佐比賣山も。今を三瓶山と云てあり。其外出雲
ふ由ある地ども多れば。神世ふを。此安濃郡ありてゆも。

出雲、因ありて。けりて靜岩室を四里ありて。西、邇摩郡
と所思あり。けり。けりて靜岩室を四里ありて。西、邇摩郡
温泉津村と云處に温泉ありて。此ふも二柱神を祭りて
湯宮を稱は。温泉津村を和名抄ふ。近摩郡よ。温泉とある
て今も在り。是ま。はと此邊に神々山と云ありて。高小
因あり地名あり。はと此邊に神々山と云ありて。高小
峻し。此巖窟あり。其處に二神を祭りて。此巖窟のさま
甚も妙あり。有状あり。此も由。凡て此石見は。彼此ふ。妙り
有げふ見も。依大岩窟あり。凡て此石見は。彼此ふ。妙り
見所あり。依石室に多に因あり。故に名を負と依ふを非じ
の。と云へり。此正業を。彼因の霹靂神社の神。然まば何處
を其を。定災難きよ似あま。せぬ安濃郡靜間村の魚津を
依岩室を。靜間神社に近く。殊に地名も所以ありて聞ゆ

れむ。信ふ是なる法し。然れど後人よく考ずて定むべし。けつて志都岩室と
も云は。二柱神相並びて。因造り巡給ずる布ど。少時静
は。正休息坐る處を依故の名り。めし然も有らば。因巡坐
息ひ坐る處を。諸因處くふ有法らまむ。一處定免て云む。
非うとも思ふぞ。万葉歌此趣も。一處然る名の岩室あて
を聞え。石見因ふ。現る然る地名此存とれむ。彼因ある事
は疑ふし。八雲御抄藻塩草あどふも名は出とまど何因
と云さるる。當時とくめ尋ねざりしを聞ゆ。
けつて文徳天皇紀。齊衡三年十二月庚午朔戊戌。常陸因上
言鹿嶋郡大洗磯前有神新降。初郡民有煮海爲鹽者。夜半
望海光耀屬天明。日有兩怪石。見在水次。高各尺許。體於神

造非人間石。鹽翁私異之去。大奈母知少比古奈命の御像
石あ。後一日亦有。廿餘小石。在向石左右。似若待坐彩色非
常。或形沙門。唯無耳目。此數の小石を二柱神よ從奉る。末
時神馮人云。我是大奈母知。少比古奈命也。昔造此因。訖去
往東海。今爲濟民。更亦來歸。と云ずる事もあて。法苑珠林
晉建興元年。吳郡松江滬瀆口。漁人遙見海中。有二
隨。淖入浦。漸近。乃知石像。像背銘。一曰維衛。一曰迦葉。と
る。甚とく似と。神世の傳を記留と依事也。甚古かりけ
む由を。開題記ふ。委曲よ記し辨。多依如くある。其古記
を。古事記よ撰録して。奏進れる。和銅五年をて。此齊衡三
年まで百四十五年あて。少毘古那神の常世因ふ渡。坐る

古傳を記留むる時ふ。後世ふ。かく。依事此有むとは誰ら
知らむ。此一事を以ても。神世の傳れ正しく。案ある事を
辨ふ。然し。人の神世此傳を疑ふ。倫ふいふ言ぞ。ちて此時
の御語ふ依れむ。少毘古那神也。常世。因ふ渡坐る後ふ。其
御後を追て。大名持神も渡坐る。其は此因を造竟て。皇
美麻命よ避奉。給子依後ある。はき事。言も更あ依ぐ。其
やぐて。少毘古那神を助て。外因くを經營。因免むとて
往坐る。よと。是亦言も更れめ。行を見て辨ふべし。偕
は。同紀ふ。天安元年八月乙丑朔辛未。在常陸。因大洗磯前。酒列
前。酒列磯前神等。預官社。十月己卯。常陸。因大洗磯前。酒列

磯前兩神。號藥師菩薩名神と。何。所謂久須理師是也。推古紀。醫惠日。醫訓。久須志。光明皇后。佛足石。哥
德來五世孫。惠日。小治田。朝廷。御世。被遣。大唐。學得。醫術。因
号。藥師。遂。以為。姓。此。亦。謂。醫。也。蓋。因。藥。師。名。以。稱。菩薩。從。俗
稱。也。今。也。諸。因。二。神。之。所。鎮。座。至。莫。不。安。藥。師。仙。吁。不。亦。甚
哉。とい。へり。常。陸。志。ふ。も。二。神。者。本。朝。始。教。醫。術。神。故。淨。屠
氏。以。其。名。近。似。附。托。欺。愚。民。延。及。朝。廷。者。矣。と。見。え。り。
神名式。小。鹿嶋郡。小。大洗磯前藥師菩薩神社。大。名。神。那賀郡
小。酒列磯前藥師菩薩神社。大。名。神。と。載。さ。せ。と。依。即。是。あ。り。
常陸誌。小。大洗磯前。神社。在。鹿嶋郡。酒列磯前。神社。今。ハ。寬
文三年。秋。平磯村。人。發。古。塚。得。石。棺。棺。内。有。種。々。器。物。如。甲
冑。者。如。旌。旗。竿。者。又。有。太。刀。一。口。短。鉞。一。口。陶。器。兩。三。箇。塚
外。四。面。數。百。步。頃。皆。埋。陶。器。狀。如。牆。址。老。父。相。傳。磯。前。明。神
墟。云。と。あり。今。ハ。形。の。は。と。是。小。就。了。按。ふ。小。神。功。皇。后。の
如。き。御。社。何。と。ぞ。御。歌。小。常。世。よ。坐。り。岩。立。り。少。御。神。と。詠。給。ひ。前。小。舉。と。依

式ふ。能登圀羽咋郡ふ。大穴持神像石神社。能登郡ふ。宿那彦神像石神社とあるも。常陸圀ふ有し如き。神態の有けむ由何依社ふ依るし。此、兩社のこと。清和天皇紀より貞觀二年六月九日。能登圀大穴持神宿那彦神像石、神二前、ちて山城北京。五條天神社も。小彦名、並列於官社とあり。鎮座の年は詳あらばと諸書ふ云ふ。神記より。空海法師が始て祭まる由云ふハ信ダとし。偕この社よて。毎年の除夜よ。木餅を供ふ依祭あり。人皆詣て其餅を取る。此を勝齋といふ。病を除く為あり。四、四季物語世諺問答あぞ見べし。さて天皇此御惱みのと死。或は諸圀ふ疫流行て。騒しき時おどふ。此社ふ鞆を懸らる。そを此神病を療る神ふ依故よ。天子の不豫まよて疫流行る。此の事あまむ。此神の怠とて挂るありとぞ。昔ハ勅勘此人の家ふは鞆を挂て。出入を得ざらむる例あり。鞆馬山よも。鞆負明神と云あり。是も鞆を挂らば。神ありぞ。諸書よ見えたり。ちて伯耆圀粟嶋

ふは。右此由有まむ。決免て此神の社あるべきふ。式より見えば。紀伊圀名草郡ふ。加太神社と何依を。諸書よ粟嶋神社とて。少毘古那神ある由云ふ。加太を地名ふて。和名抄よは海部郡よ入まて。加太、郷と何り。南紀名勝志よ。加太、庄加太村の西南、辺よあり。社家の説よ。此神古くは友島の中。小島手と云ふ。在しを参詣此便あしき故ふ。中古今、処ふ移りて云といへ。中古を其処り坐おら免ど。本を決めて伯耆圀をり移ると云ふ。然らで。粟嶋を云ふ。無あ不諸けまむあり。故、本此粟島ふ。社おきよや有らむ。圀ふ。式外ふて。此神を祭れと聞ゆ依が多う依中ふ。三代實録よ。元慶三年三月九日。下總圀正六位上小松神。從五位下。とある神ハ。今香取郡ふ在る。神崎社あること。彼社ふ傳はる。數の古文章を見て知ると依ら。此ふ祭依神も。

少毘古那神ありなり。其をまが社の在所を。今を神崎と云ふども。正元元年此古文書ふ。神崎大明神御領小松郷と見えて。今め社の坂本を。南方より少し放れて。小松村を云ふ村名あり。然れど正元此頃は。此邊を去れて小松郷と云ふ。さまど此郷名。和名抄よを見え。其後より又正元二年此古文書ふ。總領宮和田。小松。上畠。多賀。青山。あどいふ神領の村名見え。あるが。今も此邊小其名此村に有也。今此社あるを小山よて。謂ゆる坂東太郎といふ。大河よさし出と依崎あり。山号を双生山といふ。俗名を知らで。ナニジヤモンジヤ此木と称ふ。名高く大なる神木あり。己見よ。藪肉桂といふ木の老木とあまは。故よ。いけ。う。葉形の変れ。け。て此社此祭神を。少毘古るよて。楠木の類。此香木あり。

那神ありと云由は。承平二年と云。次くお社殿を公たり造營し給する状を圖せる古文書ふ。西方有大浦。俗眞世宇良云當浦。中當社。明神住給。白鳳二年癸酉二月一日。當山影向六所鎮守とあり。六所と云。上よ引とる。正元二年此を大川を隔て。西方常陸國河内郡お寄と依浦ふて。其所ふいと小き浮嶋二於並ひて。其傍よ小祠二あり。粟嶋神と云ふ。はと此嶋を舊とり。粟嶋とも。二嶋とも云ふ。後神崎神。紀伊國加太浦と云。此嶋よ乘て移し給す。依が。後ふ今此地より移し奉れり。所の古老此傳あり。おを浮島由。洪水の時も。水よ隠ゆ。事あく。常のおとし。片葉の葦生とまど。神此惜み給ふとて。取人れし。此所をり時。

神崎社、元世に謂ふ龍燈と云物の上りて、往來の者も御島
人多く、此の神あり、社家も、彼島を本此地と傳
様と云て、何の頃か、神主、神崎、光武、己が教子、お依故、
来り、然るに、其の神主、神崎、光武、己が教子、お依故、
く、探り、然るに、其の神主、神崎、光武、己が教子、お依故、
まじり、お思ひ、合は、事あり、其の社、お依故、
ら、あり、此の所、隣郡、海上、郡、常世、田、とも、小松、と、め、
此、薬師、を、舊く、栗島、神、を、云、し、を、何時、を、正、す、
と、正、と、若、き、ち、ど、老人、の、物、語、あり、と、云、す、
最、古、く、小、松、郷、あり、神、崎、社、此、神、を、移、し、祠、れ、る、社、
む、も、知、ら、ず、少、毘、古、那、神、を、小、松、と、も、常、世、田、と、
め、云、こ、と、少、毘、古、那、神、を、小、松、と、も、常、世、田、と、
社、お、祭、る、神、も、少、毘、古、那、神、お、坐、お、と、疑、ひ、お、し、
や、ら、む、古、と、正、管、お、納、と、る、は、お、て、神、主、も、知、ら、ず、
殿、の、神、躰、あり、と、云、物、を、図、せ、依、形、を、見、る、よ、舊、く、
お、坐、お、と、疑、ひ、お、し、
や、ら、む、古、と、正、管、お、納、と、る、は、お、て、神、主、も、知、ら、ず、
殿、の、神、躰、あり、と、云、物、を、図、せ、依、形、を、見、る、よ、舊、く、
お、坐、お、と、疑、ひ、お、し、

佛の龍神、此像とて、物、ま、る、お、似、と、め、中、頃、を、此、社、も、甚、
佛、風、を、相、殿、お、祭、り、ら、む、故、お、二、座、と、云、傳、へ、と、る、お、ら、む、
神、を、相、殿、お、祭、り、ら、む、故、お、二、座、と、云、傳、へ、と、る、お、ら、む、
凡、て、此、辺、に、お、海、神、由、あり、社、多、く、か、の、龍、燈、と、云、ふ、物、
此、往、く、上、る、お、と、も、海、神、由、あり、社、多、く、か、の、龍、燈、と、云、ふ、物、
の、事、お、依、り、出、會、ひ、薬、方、の、書、を、授、け、り、と、い、ふ、人、の、子、此、社、
よ、て、異、人、お、出、會、ひ、薬、方、の、書、を、授、け、り、と、い、ふ、人、の、子、此、社、
別、お、委、く、記、せ、る、物、あり、此、社、お、祭、神、お、由、あり、事、あり、此、
因、り、い、
さ、ら、
記、し、
出、於、

於是、ニ、オホクニヌレノカミウレヒテノリタマハク、アレヒトリ
於、是、大、国、主、神、愁、而、詔、曰、吾、獨

而、何、能、得、作、此、国、孰、神、與、吾、能
レ、テ、イ、カ、テ、カ、モ、エ、ツ、ク、ラ、ム、コ、ノ、ク、ニ、ライ、ツ、レ、ノ、カ、ミ、ト、モ、ニ、ア、ハ、ア、ヒ

ツクラマレコノクニヲトノリタヒキコノトキニタチマキニアヤキ
相作此国耶詔出是時忽然神
ヒカリテラレワタノハラヲレテシロキヨソホヒアラハレナミノホニテ
光照海原爲素裝束現浪末而
モチアノヌホコヲテアリヨリクルカミソノカミノリ
持天薙予而有依來神其神詔
タハクヨクヲサメアガニマヘヲバアレトモドモニアヒツクリナレ
曰能治吾前則吾共與相作成
テムモレズシカラハクニガテマシナリトノリタマヒキカレ
焉若不然則国難成焉詔矣爾

オホクニヌシノカミトヒタマハクシカラバイマシハタレゾモ
大国主神問曰然則汝者誰耶
コタヘタマハクアハイマシノサキミタマクシニタマナリオホ
答曰吾者汝出幸魂奇魂也夫
クニヌシノカミマラシタマハクウシカリスナハチレルイマシハアガ
国主神白曰唯然迺知汝者吾
サキミタマクシニタマナリケリイマオモフスマムトイゾコニゾト
幸魂奇魂也矣今欲住何處耶
マラシタマヘバノリタマヒアレヲバイツキマツレトヤト
白出則答言吾者伊都伎奉倭

ノアラカキヒムカシノヤマノヘニキカレニカレコツクリ
出青垣東山上矣。故於彼處營

御室而令鎮坐矣。故云御室山。

此者大三輪出大物主神也。大

国主神出和魂也。亦此神出荒

魂神者。坐狹井社也。

愁而ハ。少毘古那神の常世国ヲ渡シ給ヒ故也。○獨而

之比登理志氏と訓べし。師云万葉三ノ草枕客之有者。獨

爲而見知師無美。あまを契沖グヒトリ平テ。と訓 十二ノ

二爲而結之紐乎。一爲而吾者解不見直相及者。古今集ハ

獨して物を思ふば云く。此餘も何也。今世も常如此云

あ也。○何能得作也。伊加傳加母延都久良牟。と訓べし。那

敘余久都久流許登袁延牟。と訓む。漢 〇孰神與吾。あ

孰之神登共爾吾波。と訓べし。師云。耶字讀べ。凡て

る言の下。乎耶哉。あどの字を置く。夜と讀。こを常。あ

れども御国語ふ。孰何誰。あど云。ぬぐひの言。れ結。め

やと云ぬぐひ多きハ漢文
讀み耳習於るひぐ事あり
ちて古事記ふを右に如く愁
而云く少有を書紀の傳ふては
自後國中に成ざる所を
ば大己貴神獨して巡造
出雲國に到坐して此國を理
まると唯吾一身にみ吾と共
天下を理れ依神を蓋有
むと興言し給ふ依時よ云く
と有を異ある傳あり然れ
と此
古事記の趣ぞ然るべく覺ゆ
ぬ布徴ふ云へるをも見依べし
○神光照海云く末ふ
豐玉毘賣命馭大龜而光海原
云く參來焉垂仁天皇卷よ
肥長比賣光海原自船追來
おとも有也皆御魂の進む時
ふかく依神光の正さて上よ云る書紀に傳ふ依ら○天
蘇ヌホ乎コ蘇ヌホを奴と訓て玉の意ある由
此を天地初發に處ふ
第三十六段に傳ふ云す

出づ依天津神の伊邪那岐伊邪那美二柱神に賜へる天
瓊戈とは異なるが其に擬乎依物ある故よ同じく奴保
古を云ぬる依し彼を直よ天津神の御靈と成生出給
て玉よ金氣を含ま依如き質ぬる後に見ゆるを異よ
依く思を依くよと彼段に云りかくて其狀は如何と
云よ此を正上よ既く種々の成る也と所思れむ之ヲ
銜杵おと云其等此類ある依く玉は御靈に璽と飾付と
る物あり依依しあふ第五段に傳○吾前を師云凡て古言
ふ神よ前と云るよと多し末ふ天照大御神の詔ふ如拜
吾前伊都伎奉まと思金神者取持前事爲政水垣宮段ふ
天皇此大御夢ふ大物主神の詔よ令祭我御前者神氣不

起云。此みあらひて何まも美麻幣と訓べし同段ふ於御諸山拜祭意富美
和之大神前と見え龍田風神祭祝詞よ風神此詔ふ吾前
乎稱辭竟奉者云。此中ふ多事もれく其神
此御前と心得て有はきも有まど又常よ云前の意ふて
は少う通え難きも何也故思ふよ前を座と同くて本其
神の御座位を指て云言あ也右ふ引る文ふ前ち多御座
位を指て云ぐやのて其神を指て云あまむ治吾前とは
即治我と云あむあ也右よ引る文どもを考すて知はし
中昔の言よも貴人をさしては意麻閉せ云り今世よも
御前と云是ふおあじ又中ごろ婦人の名よ某前某御前
聞也也儲まと墨江之三前大神伊豆志之八前大神あどあ

ゆも三座八座と云せ同くて座とを其神の座位を以て
其神の員を申あ也是まよ中昔の物語文あどふ貴人
所二所と云るも同意あり称徳紀詔ふも二所の天皇とあり其を神此みふめ非也孝
徳天皇紀此詔ふ神名王名逐自心之所歸矣付前く處
と何也注よ前く猶謂人く也とあまむ人よも云しれ
也付とを名よ付るを云神名まよ古の皇子よちの名を
首ふ見えとる座前社の差別なめ委く傳せ○能治師云
此能字ハ善まよ熟れむれ意と聞ゆれむ與久と訓はし
治とを凡て物を棄措び收舉て狀ふ從ひて其がう子を
宜く物ゆるる云末ふ大國主神の詔よ吾住所者云く而

治賜則云くとあると此を同くて宮を造營て齋祠るを。
治を云あ也。其由下文よはと因治養其御子之縁云く玉
垣宮段ふ。天皇之御子所思看者可治賜。おの二此治む同
く養育を云す也。高津宮段ふ。因太后之強不治賜八田若
郎女とあるを大御心の隨よ召入て寵給ふ事をも得爲
ぬ万は姦を不治賜といす也。續紀の詔ふ款將仕奉人者。
其仕奉禮良年狀隨品と讚賜上賜治將賜物曾止詔とあ
ゆを始ふて冠位上賜治賜布。れづく多くあるは官位を
授進とるふを治ぬ万ふと云あゆ。右のけろく。事を異
れども意を皆同じ。まよと收納理修等此字を訓も其餘固
袁佐年と云言の意を皆同じ。

を治む。病を治む。亂を治む。あども皆同意あ也。○今云袁
言むもと機の箴より活用しとる言よを非ざるう。まよ
長を袁佐を云も所を袁佐年流より出とる言れゆべし。
○共與ハ。師云岡部翁此登毛杼毛と訓まおゆ面白し。六
帖ふ。まよもくを思ひ來おまよ雁がねを同じ里子も歸
らげ正けり。後撰集ふ。背かれ松の千歳此布をよ正め。
まよもくとまよ慕ハれぞせま返し。ともくくと慕ふ涙
此漆水はいのれる色小見えて行らむ。まよ見也。今世も
常云言れ也。古言あゆべし。凡ふ古言の中昔此書りをを
言ふ存れるが○難成焉を師云。那理加氏麻志と訓べし。
多きぞかし。
麻志を年と。崇神天皇紀歌ふ。多誤辭珥固佐麼固辭介氏
云よ同じ。

務介茂カモ難越カタよ越カタ。万葉二ふ。佐不寐者サハ遂爾有勝麻之目ニ。四ふ。此月期呂毛有勝益士コソはと妹爾戀乍宿不勝家牟イネ。れどカのるふ依まカ。今云此言の例の加氏カは消難行難おどキエ。と同くて難き意おカ。はと加泥と云ふも通ひて聞也。万葉三ふ。別不勝鶴カこの加泥ふ。不勝を書ると右ふ引る加氏カ。ふも同字を書るとを思ふべし。加氏を不勝を書はと多閉受と云意を取まるあるは多閉奴を難きと同意おれむおカ。○今云此言を不勝とも勝をも書るふ就て委カ。き論あり記傳。○幸魂奇魂を本ふ幸魂此云佐枳彌多摩サキ。ふ就て見べし。○幸魂奇魂を本ふ幸魂此云佐枳彌多摩サキ。奇魂此云俱斯美施摩と何カ。師云此を共ふ和魂の名ふカ。て。幸奇とは其徳用を云おカ。二魂よは非也。幸魂を荒魂カ。和魂をびる。其故を若二の魂あらむ二神と現ま給ふはカ。

きふ。今現ぬるふ神を一柱おカ。はと出雲国造神賀詞よカ。も。倭の大美和カは此神の和魂とあそ見えとまカ。其文を引て委カ。けり幸魂とを私記よ。是左支久阿良之无カ。く云多見と。けり幸魂とを私記よ。是左支久阿良之无カ。留魂也と云て。字此如く其身を守て。幸あらはる故の名あり。神功皇后紀よ。和魂服玉身而守壽命と何は是其カ。とを。奇魂も字此如くよ。奇靈徳を以て。萬事を知識辨カ。悟ま。種く此事業を成しむる故の名おカ。万葉五ふ。可武別て。種く此事業を成しむる故の名おカ。志美多麻と何るを石字稱て奇玉と云るれまむ魂カ。のこふを非交即上よ。眞玉成二此石を何を以て知カ。し。けり今大國主神の己命獨しては。此因得作竟じと憂カ。給ふは。あぐ荒御魂れみ進みて。和御魂の乏かカ。しれ也。

書紀よ、理此、因唯吾一、身而己と云、故今産巢日、神の御量
て、誇り給ふ状ある傳ふても同じ、故今産巢日、神の御量
ふて、別ふ其、和魂の御形を現はえて、如此示し教し、免給
れ也。萬事、成し御、聖あり、皆加く多此、教の隨、齋祠とる
ふよ、因て、和魂満足し、榮坐て、其御身を守り、幸へ賜ひ、奇
靈死徳を以て、遂ふ天下を作、竟し免給ふ、故是を幸魂奇
魂と云ありん也。此幸魂奇魂を、漢籍よいはゆる魂魄
せむ、説れど、皆ひぐあとなり、又あくの問、答、山崎氏
どぐ、自問自答と云る、れぞ、漢意よ、溺れて、神道、をえし
らぬも、篤胤、熟く、此師説を考ふ、依ふ、幸魂奇魂、れぞ、
此、大抵如此く、ある、げら、まど、委うら、び、然る、を、ま、於、此、大神
此御上れと、其御魂の大ある、と、凡人の上、あど、く、を

遙ふ勝れて御坐せむ、幾柱よ、め分り給ふ、法、事、
云、申ひも、更あ、也、然、まど、も、唯、御魂、れ、大、ある、故、分、り
給ふ事とのみ思はむ、如何あ、也、も、此御魂、を、其御本
體、れ、成、生、給ふ時、天津神の大御魂を、殊更、分、賜、り、給
ひて、今、生、給、り、る、故、其、を、別、て、幸魂、と、云、ひ、又、そ、此、靈
妙、ある、徳用、を、爲、給、へ、依、故、奇魂、を、は、稱、ひ、よ、て、是、を、總
て、は、和魂、と、申、ひ、事、と、ぞ、思、ハ、依、く、今、かく、寄、來、給、へ、る、時
を、知、し、看、さ、ぶ、誰、ぞ、問、給、へ、る、程、の、事、ある、を、思、ひ、て、奇
魂、と、申、名、義、を、悟、る、法、し、いと、奇、妙、れ、依、事、あら、
也、但、し、此、を、此、大神、のみ、然、依、よ、非、更、都、て、の、神、れ、御、上
も、必、有、べ、き、事、り、て、其、大、小、優、劣、を、ある、可、ら、ま、ど、幸魂
と、云、る、必、天、神、れ、賜、へ、る、物、と、思、ふ、法、く、奇魂、を、云、を、其
徳用、の、靈、妙、ある、所、を、美、稱、へ、て、申、ひ、事、と、思、ふ、べ、く、此、字

常より取總て、只み和魂と申事と心得て、違ふこと無
るべし。又畏々まど、凡人の上も、小く申き事こそ異れ、其
趣ハ同事と思ふべし。此事余、委き考あり、其は
神武天皇、卷、鎮魂祭の処、注ふを見て知べし。○唯然
迺知汝者云く。唯を宇く、を訓はし。宇くは、今世、人も常
にいふ應聲を也。古書、稱唯と書て、乎く止申と讀む乎
乎は、此宇く、此轉まるよて。諾を也。万葉十六、否藻諾藻
とと、然、諾、字を思ふ也。師説、小も、万葉、否、諾も、源
信明集、歌、い、あ、と、め、う、と、も、云、は、て、と、拾玉集、歌、あ、や
う、や、と、云、人、あ、よ、も、あ、し、と、有、る、あ、や、う、や、は、否、や、諾、や、あ
也。諾、を、即、乎、い、と、同、じ、今、世、も、乎、と、も、宇、と、も、云、也
也。世、互、り、隔、あ、く、語、ら、ふ、こ、と、を、う、や、あ、や、
小語らふと云ふ也。諾や否やれるべし。然とは、寤り然

ふ有る也。諾ひ悟り坐る由、此御語也。依來坐る神也。
今かく別、小現を、御座せど、寤は御自身、此御魂の、御軀、
字分、坐る、あ、依、故、り。吾者、汝之、幸魂、奇魂、也、と、ふ、御語を。
聞看て、也。然、は、ぐ、あ、御心、う、慥、あ、應、へ、て。寤、あ、然、有、る、也、と。
悟、坐、る、也。也。迺知と詔する御言よ、心を、然るは、古くも
今も、生靈とて、人の魂、此軀を、分りて、奇異、あ、依、靈、を、成、也、
也、多加るよ、準、了、て。此の有、状、字、も、曉、り、祢、加、し。古くも、今、
も、近、江、国、あ、る、女、此、生、靈、也、京、も、來、て、恨、み、思、ふ、人、を、殺、せ、
る、也、と、尾、張、国、あ、る、句、經、方、と、云、者、の、妻、也、生、靈、と、現、ま、り、
依、類、の、物、ぐ、と、り、數、あ、り、今、世、も、然、る、類、也、事、多、く、あ、り、
て、見、聞、と、る、事、も、あ、る、也、此、よ、と、洩、し、於、但、し、そ、が、中、小、其、
生、靈、也、人、あ、り、憑、て、恨、み、惱、ま、り、其、本、人、の、自、然、り、と、も、
知、ら、で、あ、依、事、め、多、う、也、此、段、あ、己、命、也、御、靈、也、別、あ、分、り、

て現れ坐るおとを。知看さ。爰て問と万子。趣みとく符
子り。漢籍も加くる事。の多く見えぬ。依中。蒙求とい
ふ物。青女離魂とあ依條。此魂の分。正て二人と成りて。
異地。り。ゆめて物。せ依を。其本人。此知らて有し。其魂の
家。子。帰れる時。子。軀と魂と合ひて。一人とあれる。おとを。
殊。子。由ありて。おお也。此字。医書。よ。病を為と依。中。よ。
精。の。ら。然。然れ。む。此。和魂神の。今。現。坐。依。去。せ。は。早く。御
軀を分りて。異。国。よ。渡。坐。して。其。国。く。を。造。巡。正。お。と。其。国。
趣。よ。隨。ひ。て。種。く。の。功。業。を。外。し。居。給。ひ。け。む。ぐ。本。體。の。今
ち。も。少。毘。古。那。神。此。避。給。子。依。お。と。を。愁。ふる。荒。魂。此。み。進
み。給。ふ。お。と。を。彼。奇。魂。此。奇。志。く。空。お。悟。ま。して。幸。魂。此。幸
子。助。け。給。む。む。せ。還。坐。る。ふ。ぞ。有。べき。故。海。原。と。正。依。來。坐
る。正。崇。神。天。皇。卷。七。年。の。処。よ。大。御。夢。よ。大。物。主。神。の。現。ま
て。以。吾。兒。大。田。く。根。子。今。祭。祭。吾。則。云。く。海。外。之。国。自。當

婦。伏。と。御。誨。し。坐。る。が。其。如。く。為。給。ひ。し。う。ち。後。お。果。して。
海。外。人。の。参。來。し。を。も。思。ふ。ほ。し。外。国。く。の。事。を。も。掌。給。ふ
こと。著。明。き。但。し。其。め。産。靈。大。神。此。幽。お。御。量。坐。る。よ。依。こ
も。此。を。や。お。あ。る。は。言。は。く。も。更。お。正。は。と。かく。御。身。を。分。依。お。せ。え。
和。魂。の。み。お。ら。び。荒。魂。も。御。身。を。分。正。て。功。業。残。為。給。ふ。こ
と。何。正。大。国。御。魂。神。と。申。ひ。え。即。荒。魂。神。此。分。り。給。子。依。時
此。御。名。ふ。ぞ。有。ん。依。但。し。そ。は。大。国。主。神。此。み。お。ら。せ。卓。ま
る。を。悉。く。其。事。の。見。え。さ。る。が。多。り。は。い。○。青。垣。せ。え。青
か。あ。る。事。お。う。記。し。洩。せ。依。よ。も。有。べ。し。
山。此。国。の。垣。と。お。正。て。周。廻。ま。依。を。云。お。と。既。よ。師。説。を。舉
て。注。せ。り。此。第。八。十。七。段。此。傳。見。べ。し。外。布。師。説。よ。此。を。垣。お。用。は。無。れ
ど。あ。ら。山。の。お。を。常。お。青。垣。と。云。お。ら。子。る。故。よ。如。此。云

の末と下よ引く。出雲、因造神賀詞。皇孫命能。近守神登
貢置天。と何る意。其鎮坐むと何る處も。倭因を衛護
依垣。依意。よて。如此云ふも有べしと何也。○東山也。
師云。御諸山也。倭の因中此東方よ在て。其山次まおとふ
垣如也。但し東山と詔言依也。あぐ汎く東方の山を云ふ
也。あるべきを。其東方山の中ふ就て。御諸山をば。擇びて
祀也。しれ依也。又思ふ。東方此山と云ふと何らば。東
之青垣山也。有べきふ。青垣を上よ置て。東山也。あ依也。一
の山名を指る。が如くも聞也。故考ふる。神名帳大神社の
次ふ。神坐日向神社。大月次。何也。貞觀元年。從五位上を
新嘗。授奉ら依。三代實錄よ見

此社三輪山也。巔ふ在て。今高宮と稱也。若宮とも云
也。或書ふ云也。然れむ御諸山の舊名日向山と云ひし。若
然らむ。此よ東山とある。よ依て。彼神社の日向を。比
牟加志と読べし。舊名此。ある。此神社。ふ残ま。る。あり。
○日の出る方を。東といふ。山上。を云ふ。限らば。ま。と山
邊。此意。よ。非也。あ。山。を云ふ。と。何也。山。と云ふ。も。同。じ。
野。あ。ど。も。皆。と。海。岡。野。と。云。○伊都伎奉。去。此。語。上。ふ
出。て。既。よ。注。せ。也。第。二。十。五。段。奉。は。祭。記。あ。也。あ。ぐ。尊。み。て
漆。多。云。辭。此。奉。ふ。を。非。也。と。師。此。言。れ。と。る。が。如。し。但。し。祭
稱。此。奉。も。言。の。ち。て。大。因。主。神。此。和。魂。の。大。美。和。小。鎮。座。る
意。を。一。あり。由。縁。は。右。此。如。く。あ。る。ふ。出。雲。因。造。神。賀。詞。よ。天。下。此。現。事

をむ。皇美麻命、事避奉^{サリ}給ふ時、皇美麻命の近守^キ神
ふとて、己^{カレ}命^{ミコト}此^{コノ}和魂^{ニギハヤヒ}を、大美和^{オホミヤ}よ坐奉^{マカ}給^{タマフ}牙^{ツバ}めと有^{アル}は傳
の異^{イヘ}あるよ似^ニこまど、然^{シカド}るを非^ヒざ、此^{コノ}を師^シ説^トふ、天下^{テンカ}よ因^{イン}
むしも多^タ久^ク依^イふ、今^{イマ}かく倭^{ヤマト}因^{イン}ふしも齋^{イハヒ}記^キれと詔^{ノリ}給^{タマフ}ふを、
後^{ノチ}遂^{ツヒ}ふ皇美麻命、御^{ミコト}く代^{カヘ}く此^{コノ}近守^キ神^{カミ}とあり坐^{マカ}むの御心^{ミココロ}
あ^アひしとと、著^{イハ}明^ミれむ、彼^{カノ}神^{カミ}賀^ガ詞^{ノミ}よむ、其所^{ソノトコロ}を云^{イハ}依^イも此^{コノ}
久^クり、或人書紀の此段の注よ、大己貴命みぢくら己が魂を齋きて、神とあふと思ふを誤あり、三諸山よ祀^{マツル}ひしハ、後^{ノチ}此^{コノ}あせぞと云^{イハ}るを、中^{ナカ}くよ非^ヒれ^レ、若^シ此^{コノ}説^{セツ}の如^スく、己^ミが魂^{ミタマ}を齋^{マツル}むむが非^ヒあらば、い^ハうで齋^{マツル}き奉^{マツル}れとを詔^{ノリ}ふ^{タマフ}は、凡^{ソト}て己^ミの私^シれさうし^ラら心を主^{ヌシ}として、古傳を信^シけ^ルは、の^ノ説^{セツ}をのみ云^{イハ}ふを、皆^{ソレ}神^{カミ}道^{ミチ}を知らぬもの^{モノ}也^{ナリ}、^{カレ}何^ニ依^イふ、猶^{モト}末^ノふ、神^{カミ}賀^ガ詞^{ノミ}ある傳^{ツタヘ}を採^ヒて記^キせる處^{トコロ}に注^ツふ

は^ハし、第百二十段の傳を見と、○御室^{ミムロ}とは、凡^{ソト}て神^{カミ}社^{ヤシロ}をい^ハふ、は^ハと御^ミ諸^モとも云^{イハ}ふ、雄^{オス}畧^{リョク}天皇^{ミカド}の大^{オホ}御^ミ歌^{ウタ}ふ、美^ミ母^{ハハ}呂^ロ能^ノ伊^イ都^ツ加^カ斯^シ賀^ガ母^{ハハ}登^トは^ハと美^ミ母^{ハハ}呂^ロ爾^ニ都^ツ久^ク夜^ヤ多^タ麻^マ加^カ伎^キ万^{マン}葉^{エフ}三^{サン}ふ、吾^{オレ}屋^ヤ戸^ド爾^ニ御^ミ諸^モ乎^カ立^タ而^{シテ}云^{イハ}く、七^{ナナ}り木^キ綿^{ワタ}懸^{カケ}而^{シテ}祭^{マツル}、三^{サン}諸^モ乃^ハ云^{イハ}く、久^クどある是^{コト}を^ヲ、神^{カミ}習^{ナラ}ひて功^{イサ}業^ノを成^ナむと思^{オモ}む人^{ヒト}を、此^{コノ}よ効^{イカ}ひて、其^{ソノ}和^ニ魂^{ニギハヤヒ}の德^{トク}用^{ヨウ}字^ジとく思^{オモ}ひて、殊^ニよ齋^{マツル}き祭^{マツル}るは、き物^{モノ}也^{ナリ}、○御室^{ミムロ}山^{ヤマ}古^{コノ}事^{コト}記^キ書^{シヨ}紀^キふを、御^ミ諸^モ山^{ヤマ}を^ヲ何^ニ依^イふを、今^{イマ}を大^{オホ}三^{サン}輪^{リン}神^{カミ}鎮^{チン}座^ザ記^キよ依^イま^ス、そは御^ミ諸^モと云^{イハ}るハ、語^{コトバ}古^{コノ}りて聞^キゆま^ス、^{カレ}三^{サン}輪^{リン}とい^ハふ名^ナの由^ユ縁^ヰ也^{ナリ}、^{カレ}崇^{タカ}神^{カミ}天^{アメ}皇^{ノミカド}卷^{マキ}見^ミ也^{ナリ}、^{カレ}三^{サン}輪^{リン}山^{ヤマ}字^ジ御^ミ室^{ムロ}山^{ヤマ}とも、御^ミ諸^モ山^{ヤマ}とも云^{イハ}るを、此^{コノ}を始^{ハジ}ふて、崇^{タカ}神^{カミ}天^{アメ}皇^{ノミカド}卷^{マキ}見^ミえ、繼^{ツギ}體^{テイ}天^{アメ}皇^{ノミカド}卷^{マキ}歌^{ウタ}ふ、美^ミ母^{ハハ}呂^ロ賀^ガ宇^ウ倍^ヘ邇^ニ能^ノ煩^{ワザ}理^リ多^タ知^チとある

ぬ。山と云ふ。此山の上を云ふ。師云万葉二。三諸之
神之神須疑。七。三毛侶之其山奈美爾云。ほと味酒三
室山。九。三諸乃。神能於婆勢流泊瀬河。おど詠るも此山
あ。ま。雄。畧。天。皇。紀。も。謂。ゆる。三。諸。岳。ま。と。万。葉。ふ。神。名。
備。乃。三。諸。之。山。と。も。三。諸。之。神。名。備。山。と。も。詠。る。あ。ど。
を。雷。山。と。も。神。岳。を。め。云。る。所。も。て。飛。鳥。神。の。坐。し。山。よ。て。
此。と。ハ。別。あり。神。岳。を。今。本。三。ワ。ヤ。と。訓。る。を。誤。あり。
ま。と。後。哥。ふ。立。田。ふ。を。今。本。三。室。山。を。古。書。よ。ハ。見。え。び。
其。を。古。今。集。ふ。立。田。川。紅。葉。あ。ぐ。る。神。名。備。の。三。室。山。心。
あ。ぐ。ま。ふ。る。ら。し。と。云。哥。を。り。始。ま。ま。り。此。哥。立。田。川。心。
得。ぬ。と。し。契。沖。く。を。し。く。辨。子。お。り。さ。ま。り。此。立。田。川。心。
大。和。國。の。立。田。ふ。は。何。ら。び。お。り。別。ふ。考。あり。凡。て。古。書。の。
三。諸。山。を。も。後。人。を。心。得。違。へ。て。立。田。此。何。と。思。ふ。ハ。
非。事。ち。る。御。諸。と。は。何。處。ふ。ま。ま。神。社。の。お。と。那。る。ふ。此。山。
ふ。し。も。其。名。を。負。る。を。取。分。て。此。大。神。を。尊。崇。免。ゆる。ら。あ。

也。今、京よて、祭とい、子む賀茂祭山。○大三輪之大物主神
也。おを彼鎮座記ふ。即營御室於大倭國磯城縣青垣山使
就居故號曰御室山。諸山。此大三輪大物主神也。とある
小依ま。御名此義。ま。其掌給ふ御功業のおを。末ふ
委く云。第百二十段。○大國主神之和魂也。彼神賀
詞よ。己命乃和魂乎。倭大物主櫛王命登名乎。稱天大御
和乃神奈備爾坐天。と見え。孝昭天皇卷ふ記せる。大己貴
神の御誨。我。和魂者。自神代鎮三諸山。而云。と有。れ。ど
小依ま。故古事記よ。此御名。大國主神の亦名を。奉。と
神と始。免。て。見。え。と。其。外。も。古。書。の。正。し。き。傳。ふ。美。和。大。物。主。
社。よ。就。て。云。と。死。ハ。此。御。名。を。申。せ。る。例。あり。然。る。を。神。代。

紀も亦名を數舉とる処も此御名をも出さまし誤を受て古語拾遺も亦名を舉とる処も此御名をも出し姓氏錄も大神朝臣あどの條も大物主神之と云はき字大因主神之といふ處も數何處も此由を思わざる誤もぞ有けりて神名式も大和因城上郡も大神大物主神社名神大月次也ある御社は是也。文德天皇紀も嘉祥三年十月辛亥大物主神奉授正三位仁壽二年十二月乙亥加大和因大神大物主神從二位と見え清和天皇紀も貞觀元年正月廿七日勳二等大神大物主神奉授從一位同二月丁亥大和因從一位勳二等大神大物主神奉授正一位あぞ見也大神三社鎮座記も奥津磐座大物主命。中津磐座大己貴命。邊津磐座少彦名命。有三箇鳥井と何也。清輔朝臣

の奥儀抄も祭日も三の茅輪を岩上も置て祭ると見え今も鳥居三ありと云はば古くも大物主神一座ありしを後も大己貴少彦名神を配那布此御社此あやまは崇せ祭りて三座と為と何と見也。那布此御社此あやまは崇神天皇卷も委く注ふはし。神代第百二十段。○此神之荒魂神者云く。此神と云。三輪之大物主神を申せ也。抑此神はしも大因主神の和魂神と坐るもはと其和魂神も荒魂神の御坐り也。式も城上郡も狹井坐大神荒魂神社と何也。神祇令義解もも狹井者大神之麁御靈也。と見也。師説も大三輪も坐神也。大因主神の和魂あるも對へて狹井社を大因主神の荒魂と心得る人あらむ。然も此あやまはと云れしを案然る言れ也。凡そ和魂荒魂此あやまは第二十七段の傳も注せし。此御社のおやまも崇神天皇卷も委くるを合せ見るはし。此御社のおやまも崇神天皇卷も委く

注ふ
考し。

於是大国主神其荒魂與和魂
コ、ニ オホクニヌレノカミソノアラミタマトニキミタマ
 於是大国主神其荒魂與和魂
アハセチカラヲヲヒロホコツカシニツヱトテハラヒムケクヌ
 戮力以廣予為御杖而撥平国
チノ アレキモノヲテクニツクリタマヒキカレマタノミナラ
 中出邪鬼而国作給矣因亦名
マラスヤチホコノカミトソノクニメグリタマフトキニイタリマレ
 謂八千矛神其国巡出時到坐

出雲国手染郷而此国者丁寧
イヅモノクニタレミノサトニテコノクニハタレニ
 出雲国手染郷而此国者丁寧
ルツクレクニナリトノリタマヒテナツケタヒタレトキイマノヒト
 所造国也詔而號丁寧矣今人
アヤリテイフタレシトスナチアリホクラマタコノオホカミ
 訛謂手染即有正倉亦此大神
アマノミイヒダノミクラムツクリタマハトコロマギ
 天御飯田出御倉將造出處覓
メグリイデマレキソノトキハヤサメクタミノヤ
 巡行矣爾時暴雨久多美能山

トノリタマヒシトコロヲイフクタミトマタコノクニハナラズ
也。詔出處云玖潭。亦此圀者。非

大非小川。上者木穗刺加布川。ガホキカラズチヒサカハカミハキノホサレカフカハ

下者河志婆這度出。是者爾多。シモハカハシバハヒワタレリコハニタ

志枳小圀也。詔出處云仁多。亦。シキヲクニナリトノリタマヒシトコロヲイフニタトマタ

見行三處鄉而。此地出田好。故。ミツナハシミトコロノサトヲテコノトコロノタウルシカレ

吾御地出田也。詔矣。故云三處

也。

於是と云を已。謂八千矛神と云までは。大倭神社注進状
小。舊記を引て。大己貴神之荒魂。與和魂戮力營天下云々。
大己貴命以廣矛爲杖撥平豐葦原中圀之邪鬼是時大己
貴命號曰八千矛神とあるを採て文を成せ已。但し本書
の文甚
長きを此よ用ある処此み。師説の如く。少毘古那神此常
を太く扱て引とゆ。世圀小渡坐る後小。大圀主神此。吾獨して。何れも此圀を

得作らむと愁坐るは一向ヒタムキ小国作らむと思ふは荒魂の
み進みて和魂の徳用ヒトイヅトモ乏ヒトイヅトモしを上件和魂神の現來ヒトイヅトモま
ちて助タマ給タマる故カラふが此車の兩輪フタツク此如く二此御魂ミタマ此具
足タマらしめて遂ツキ小国造の功績を成給タマす依ヨ此を其荒魂與ト和
魂戮セ力チカラ云々とを語コト傳ツタへしお正マサ○以ヲ廣ヒロ予ホ爲ツカシ御杖ミツツト而廣
予ホとは其刃鋒ハサキ此廣ヒロき由ヨれりまマと八尋予ホと云も有アま
ば八尋小長丸御予ホても有アはしサテ儲サテこ此御予ホは決キハ然カて
大物主神オホモノヌカミ此依ヨ來坐キタマる時トキ持賜テマ予ホ依ヨ薙ヌホ予ホあるべきを御
杖ツカと衝ツカして国作クニツクリ給タマへ依ヨち天地初發アメノハツ此時トキ天津神アマノハツカミとち
伊邪那岐伊邪那美神イセナキイセナミカミ小瓊予ホを賜タマひて御事依ヨし給タマす依ヨ

小符カフひて深コき由ヨ何ナニ依ヨちツ通ト也ナリ後ノチ小此コノある廣予ヒロを皇
て吾オレ以ヨリ此予ホ卒ス有ア治功チコウ皇美麻命スメノミコ用ヨリ此予ホ治チ國則クニノチ必カナラ當マ平安ヘイアン
と詔ミコトひ景行天皇ケイコウテンノウの御世ミヨノ倭建命ヤマトノミコ東國アヅマノクニを平ヘし給タマふ
時トキ比ヒ小羅木ラキ之八尋予ホを賜タマひて表ウラとシ成務天皇ナリツツノミコの御世ミヨノ諸國シヨクノクニ
因ユ造ツクリ長ナガ小楯予ホを賜タマひて表ウラとシ成務天皇ナリツツノミコの御世ミヨノ諸國シヨクノクニ
小由ユ有アて聞クえ万葉マンヤフ哥カども小玉梓タマシヅ乃道行ノチミチユクくらし多麻保
許ヨ乃美知ノノミチ尔伊泥多知ニイニタチおど道ミチてふ言コトの発語ハツゴ小お布フく詠ユ
るル上ウヘ件ケンの由ユ緒ツグたり起オキりて古コた道ミチを行ユクく予ホを杖ツツと
依ヨちやとさへ想オモ像ゾウるル起オキりて古コた道ミチを行ユクく予ホを杖ツツと
とて此コノとさへサヘ銚シウの身ミとシおけケるルのみありとけケて爲ナ
説セましは返ヘりて心ココロ浅シく覚サトゆるルたタいイかカ有アらむけケて爲ナ
字ジを意イを得エて都加志ツカシ氏ウヂを訓ツケはし○邪鬼ヤクニ之ノ神代紀カムヤマトノミコトノフミ小阿ア
志伎母能シキモノと訓ツケる小依ヨはしシ私記シキ云イハ安ヤス之ノ岐毛キモ乃ノとありアリ
此コノ天照大御神アマテラスノミコトの天石屋戸アメノイシヤドを開ヒラて幽居ユイる時トキ萬物マンモノ此
妖ヤクを發オコせる惡神アクシカミ等トモあ依ヨはしシ鬼オニを母能モノと云イハちチ第百二
十段大物主神オホモノヌカミ此下コノ云イハちチ

見る抑ニガミ惡神の初ハジメ也。石屋戸イシヤド段ノ注シる如く。伊邪那岐大神。豫母都ヨモツ固ツ此汚穢ケガレ觸給ツひし御裝束ミヨウセツを投棄ナゲウケ多シる子コ依ヨり因ヨて成ナリ出デて。此事第二十三段の傳を見て知べし。何事ナニコト付ツても世ヨ此ノとめ人ヒトのノ末ノ善ヨキからぬ事を此ノ態ノと行ユふ神等カミナリある故ユ。彼廣ヒラキ予カミ此勢德イキホヒよとツて。先マツ此ノ撥平ハシヒラケて。因ツ作ノの功績イサナを成給ツへる成ナリ給ツし。但シしあリ撥ヒ給ツ子コども是マと然ルべき故ユと。譬トへド狹ヒ蠅ハシの追アりて逐ヒまてト又マ來キ集ルはりて妖マギを為ス此ノ後ノ健ツ御雷ミカヅ神ノ天降アメノ坐カして逐ヒ給ツ子コども然ルれど猶モ殘リまると亦マ有リ撥ヒをヒれトるガまト寄ツ來キ於リるモ何ノ依ヨ故ユ。人ヒト世ヨとツ至ツりテ亦マめシ世ヨ古コく荒ワ振ヒ神ノを平ヒ給ツふト世ヨ々々聞クえ中ノ今イマめマと然ルべき幽カき由ユある事コトは知ラまスとツ巴ヒ猶モ末ノ見ミるガ注シふをツ○八千ヤチ示シ神ノと申マツ御名ミナ上ノ注シ子コ也。第七十八段の

傳見ツる ○手テ染シ郷ノ出雲風土記イセノ嶋根郡シマネノ手染郷テシメノ所造ツクラシメ天下ツクシメ

大神命詔オホカミノミコトノミコトノ此因コノ者ノ丁寧テイテイ所造ツクラシメ因ツ在ニ詔ミコトノ而故ユ丁寧テイテイ負ツ給ツ而今イマノ人ヒト

猶誤モト手染郷テシメノ云耳ト云フコトナリ。即在ツ正倉テイクラとツ巴ヒ。丁寧テイテイハ多志タシと訓ツ給ツし。然シカらシざれド手染テシメと云フ由ユあり。古事記コトワザ允恭天皇卷ニギハヤヒノミカドノマキの歌ウタ。宇都夜阿良ウツヨアラ

禮能レノのツありキ。多志タシ陀志ダシ爾ニ云フ。多志陀志タシダシを慥タシくツ巴ヒ。雄畧オウリョク天皇ニギハヤヒノミカド此大御歌オホミカドノウタも。多斯爾波章タシニルハチヨウ泥受デウケと見えミ。寢ネびテありキ。お

不慥ツクシてふ言コトは。万葉十二マンヤフニふ慥ツクシ使シ乎カ無跡ムジキ也ナリ。さテ此ノ依ヨて注シせるガ。おハ思フふコト。正タシと云フ。ちテ此ノ郷ノは風土フツチ

記ツキ。郡家ノ正東テイトウ一十里イツジュウリ二百六十四步ニヒヤクシヨウシフとツ巴ヒ。抄マシ手染郷テシメノ野原ノハラ別所ワカサト下宇部ゲウベ五村也イツムラナリと云フ。神世カミヨも多志タシと号ナとツるコト。ひしを天平テイヘイの頃ノも多志タシ美ミと誤ア巴ヒ抄マシ多須美タスミとあるコト。

まゝ後の
訛あり。○正倉とは。祠ハカあると既ハカ注ハカす。第七十三
段の傳見
し。但し此祠を。今詳れらば。○天御飯田と。田を多く
作給ひらむ中ふ。みぢの食に御飯。此田を。御飯田と
いひ。天ハカを稱ハカ言あり。其稻を納給。御倉を。御飯田之御倉を云
ふ依る。○暴雨久多美山。暴雨を。本波夜佐雨と。何ハカ也。
字鏡よ。暴雨まハカと。暴ハカ降ハカ來ハカる雨をいふ。久多美山を。は。舊
凍字おどを訓ハカ也。暴ハカ降ハカ來ハカる雨をいふ。久多美山を。は。舊
と。此名と聞ゆ。大神あハカく。巡行せる布ハカど。暴雨の降
らむ故。暴雨降美と。連ハカけ。詔ハカす依りや。倭姫命世記よ。速
る。は。や。雨降る。○玖潭ハ本。楯縫郡玖潭郷。郡家正西
と云意ある。○玖潭ハ本。楯縫郡玖潭郷。郡家正西
五里二百歩云。故云。忽美ハカ。神龜三年。改字。玖潭。と。何ハカ也。云くと
ハ。

即本文よ採れる傳説あり。ちて舊く忽美と。か。ハ。る。忽ハカ也。
許都の音お依を。久多。小。轉用せるあり。後。玖潭を。う。け
る。潭。を。多。半。の。音。お。る。殘。和名抄ハカも。玖潭ハカを。作ハカ也。風土記
多美。小。轉用せる依り。久多美村。東郷。福井。海苔。石谷。鎌
浦。十六島。古津。為。一郷。といへり。神名式よ。當郡。玖潭。神
社。あ。也。風土記。小。在。神祇官。と云。る。社。の中。久多美。社。と
何ハカ也。即。是。あり。風土記抄。久多美村。○非大非小。大那
良受。小加良受。と訓ハカべし。非。不。字。也。○木穗判加布。也。樹
枝。の。刺。相。ふ。由。れ。也。判。を。刺。の。古。跡。あり。諸。本。判。ふ。作。る。ハ
字。字。書。よ。見。え。皇。國。字。う。と。思。ふ。一。本。お。依。る。非。じ。刺。字。の。注
お。同。刺。見。紀。典。と。何ハカ也。然。ま。バ。此。字。を。今。の。如。く。寫。誤。れ。る
ある。べし。字。形。○河志婆。這。度。之。河。を。阿。よ。作。る。本。を。誤。る
や。似。と。也。○河志婆。這。度。之。河。を。阿。よ。作。る。本。を。誤。る
何ハカ也。布。這。二。字。よ。て。波。比。と。訓。む。意。ある。故。河志婆。とは。
ら。ま。ど。這。字。ば。う。也。も。訓。る。れ。省。き。故。河志婆。とは。

水楊葦あざれ水邊よ生茂れ依を今も川柴と云子む其
 ぬるばし。○爾多志枳小圀とを本小楯縫郡沼田郷の傳
 小。宇乃治比古命。以爾多水而御乾飯爾多爾食坐詔而爾
 多負給之然則可謂爾多今人猶云努多耳とある爾多と
 同言ふて今俗言ふ爾多都久といふ爾多ふ依べし。師説
 亦多てふ言を俗言よニチヤツクれど云と
 物一のヌタと云も同言の轉ありや言
 れ於る由眞竜が風土記解よ記せ也。小圀とを圀を稱ふ
 依言ふ也。然れむ文意を此地を大きくも非也。小くも非也。
 程宜くて其川上は木枝さし相ひ川下を河柴生茂れる
 故ふ爾多まぐ土此潤ひて好地あると詔する義あ也。眞
 竜

説を信ヲちて此を謂ゆる仁多郡れり。○三處郷を本小仁
 多郡三處郷即屬郡家。大穴持命詔此地田好故吾御地田
 詔故云三處とあり也。田詔二字本よ古經と誤れ也。今三は
 御あ也。文意は此地の田好れむ己命の御上田ふせむ
 と詔す依由あ也。抄よ合上下三處村富田簾琴枕高芝久
 原角木石原里田馬馳矢谷廣瀬湯原
 神畑郡村等九三所為三處郷とあり。

爾大地主神營田出時田人令
 食牛穴矣于時御年神出御子。

イタリソノタニテツバキテアヘニカヘリマシテニ三チ、
至其田而唾御饗還坐而於父

マラスソノサトキニ三トレノカミイカリマシテニ
告其狀出時御年神怒坐而於

ソノツクダハナチタマロイナムシラキコ、ニナヘノハタチチ
其營田放給蝗矣於是苗葉忽

ニカレソコネテナレシノダケキカレオホトコヌレノ
然枯損而似篠竹矣故大地主

カミシテカタカムナギ
神令片巫志止ヒチカムナギヲイマノヨノカマノワ
止鳥肱巫今俗竈輪
及米占也

ウラトハシメタマヘバコハ三トレノカミノタリナリ
占求出則此者御年神出崇也

カレタテマツリシロキ平シロキウマシロキカケヲテタマヘトナゴレソノ
故獻白猪白马白雞而宜解其

イカリヲマヲシキカレマニマソノヲレヘノニマヲレタマフ三トレノ
怒白矣故依其教而奉謝御年

カミニトキニ三トレノカミコタヘタマハクマコトニワガニコ、ロナリ
神出時御年神答曰實吾意也

カレヲアサガラツクリカセギニテカセゲスナチモテソノ
故以麻柄作持而持出乃以其

ハヲハラヒモテアノオシクサラオシソヲモテカラスアフギヲ
葉拂出。以天押草押出。以鳥扇
アフゲナホズサラハニミゾグチオキウレノレヲ
扇出。仍不去則。於溝口置牛穴。
ツクリヲバレノカタヲテソヘソレニヲツスノミナルハジカミ
作男莖形而加出。以蕙子山椒
クルミノハマタレホタマヘアガチオキソノアニトコト
吳桃葉及鹽。宜班置其畔也言
ヲレヘタマヒキコ、ニオホトコヌレノカミマニマソノヲレヘノ
教給矣。於是大地主神。從其教

ニオコナヒタマフトキニナヘノハマタレゲリテタナツモノユタカニ
而行出時。苗葉復茂而。年穀豐
三ノリキコレイマモテシロキ千シロキウマシロキカケヲマツル
稔矣。此今以白豬白馬白雞。祭
ミトレノカミヲコトノモトナリ
御年神出縁也。

此段ハ大同三年ノ忌部廣成宿禰此記さまと依古語拾
遺を採れると。既よ徴ふ云るが如し。○大地主神と申
ハ。大國主神の荒魂。大國御魂神此亦名あると。既よ
云るが如し。第七十八段の傳見べし。然るふ此條よ。其御名を以て語

已傳とるあや由あるはし。試よ言はぐ。田を作るふた。斎
ふ牛、穴を食し先給するを。思量足ざるふ似と依ぐ。荒魂
の進びありとふ意をもて。此御名よて語り傳へし。おや
 ○田人ぞと。御田を作る人をいふ。○牛は馬と共ふ。宇氣
 母智神の御頂ふ成きて。營田ふ要とある畜物あす。然る
 小其穴を田人よ食し先給する依と最も甚じと御過失ふ
 ぞ有る依阿那畏。○于時を義を得て。曾能時と訓はし。○
 御年神の御名を。上ふ出でて既ふ注す。第七十四段の其
 御子神は御名は。今知はるらば。然れど父神を共ふ。田を
 巡見て幸へ給ふ神と聞ゆ。其を至其田而とあるもて知
 られとす。○唾御饗を古は田を作るふは。先御年神と

ち小御饗を奉りて。祭れと聞えとす。今も所ふとりて
時よ。加あらば田神祭とて。御饗を備へて。祭をぬま所くあり。古の遺れる道あす。
祭をぬま所くあり。古の遺れる道あす。
 はしも牛、穴を食とる田人。此調へる依故よ。穢ハし死を
 惡ひて。唾し給へ依あす。前ふ伊邪那岐命。そ此妹伊邪那
 美命。此豫母都戸喫し給する。汚穢き御有状を惡ひて。族
 離むと詔ひて。唾し給へ依事とす。第十九段の皆甚く其
 事を惡ひ給ふ時の御所爲あり。まよ此よ依て。神ふ奉る
を。怒れ。みあらば。却りて御怒。
物ふ汚気ありては。受給
ふふる。おとをも辨ふべし。
蝗は和名抄よ。爾雅註云。
蝗。和名於保。食苗心。曰螟。食葉。曰蝻。食節。曰蠶。食根。曰螻。蝗。和名於保。食苗心。曰螟。食葉。曰蝻。食節。曰蠶。食根。曰螻。
 總名也とす。然れども。舊く伊邪牟斯と訓るふ依べし。

蝗とは稻ふちく虫の總名ある由あり。今も總て稻蟲と云ふなり。和名抄よ。於保祿无之とあり。或説ふ。大稻虫の義りと云り。然も有べし。稻を害ふ虫あり。ちて此れ故事ふ依て思ふ。稻よ蟲のちくをせむ。御年神の御怒よ觸るまば。農人あどは。此を熟思ひて。畜物此類を食むことは更ふも云ひ。穢をとく忌清むべき事ふあり。○似て那志を訓はし。爾須と同言ふは。と既よ注す。第三十二段の傳見べし。如字あどを那須を訓も。即この字此義あり。①片巫。志止。及米占也。和名抄よ。説文云。巫祝女也。和名加牟奈岐。文字集略云。覲男祝也。乎乃古加とあり。然れど直ふ巫と云は。神ふ仕奉る女を云稱あり。但し男祝

を乎乃古加牟奈岐と云は。有まど。此加牟は神那岐也。も常ふを直ふ。加牟那岐とのみ云り。今和の約れるふて。神を令和奉るを云言あり。ちて此れ那岐を泥岐と通ひて。神ふ仕奉る人を禰宜といひ。まど泥疑言。勞良布あぞ云も。同語ありと云ふ。似る事れら別なり。祿宜まど泥疑言。勞ら五十三段。まど景行天皇。卷此傳あり。ちて巫此業は。もはら女此仕奉ること。は。天宇受賣命の。天照大御神此御前。仕奉れるを事發りて。其御裔は。猿女君等。世く神和此職ふ奉仕るを起れる事あり。御巫此職も。是と起りて通ふまどあり。御巫の事。既よ第七十四段。此傳よ注るを見べし。

て片巫肱巫といふ稱此義を未思得也。古語拾遺節解といふ物も片を肩
みて肩と肱ぞふて男女を分ち男巫女巫を云々と云ひ
信友も肩巫肱巫もてそは神も仕ると志て其神の御
心の任ふ肩肱此如く功しく仕奉る由の稱よて中世
より此言よ君の御心此任み功あく奉仕る臣此ことを
君此手足とありて仕奉るあど云ふ依趣も似とゆ漢固
よて股肱臣れぞ云も同じ心むへありと云ふ也然も有
や然れぞ神世とて此古稱をば聞えと也然るも就て
片巫の下ふ志止く鳥と云ひ。肱巫此下ふ。今俗云くと何
依。廣成宿禰此自注をいぞ心得のとし。然依を令片巫肱
巫占と何れぞ古さ依名を召る巫此有志よ命せて令占
然給へる義を依ふ。注此様ふて也。片巫とは志止く鳥此
あと。肱巫と也。今俗よも行ふ龜輪占米占此事ぞと云依

如く聞えて混ハじられず也。故考ふ依ふ。古語拾遺を
奏進られし大同の頃も猶片巫肱巫と稱よ負ふ巫何
ゆて片巫と云るは志止く鳥よて占ひ。肱巫を云るを龜
輪占はと米占あどを爲るむ故其趣をもて神世の片
巫肱巫よ自注を下さましふ也。かく見ばて此此文義を何とも解べき由あり
其たま抄志止く鳥は天武天皇紀九年三月此處に攝津
國貢白巫鳥。巫鳥此言也見え。和名抄に鴟鳥。唐韻云鳥名
也。音漢語抄云巫鳥之止くと何也。字鏡よ也。鷲志止くと何り漢土の字書等も
鴟雀也とも雀屬也とも云ひま雀は小鳥此總名ある
由よも云ふり本草よを鴟を見え。貝原篤信説よあど
ぞは雀の類乃鳥を總て云名ありと云るハ違へり此鳥
を今人もよく知て青じとも青あやるとも云てまぢま

知^レおども申^入免^レめ。事^ハあひとは。見^ハむを思^ハふおを乞^ハふ。
其^ノお。吾^ノ身の成^ナ果^ハむを^レ知ると^ハ免^レす。と有^ルを。谷川氏
も引^テて。此^ノ近^キ竈^ノ輪^ト云^フす。案^ハおも似^テぬ。依^ル事^ハ免^レす。此^ノ上^ノ事^ハ
出^ル羽^ハ此^ノ秋^ノ田^ノおぼよて。除^ケ夜^ハも。大豆^ヲを。圍^ニ爐^ノ裡^ニ。火^ハ此^ノまはり
ふ丸^クく輪^ノの如^クく竝^テびて。火^ヲを移^シて。黒^クく焼^ルると。白^クく焼^ル
ると。を^レ見^テて。來^ル年^ハ此^ノ月^ノ此^ノ晴^ル雨^ハ吉^ク凶^クを。一^ニふ事^ハあり。似^テ
依^ル事^ハおまむ。竈^ノ輪^トと。竈^ノ戸^ハは。輪^ヲを免^レして。占^ムふ。由^リ此^ノ稱^ハお
べ。あ^ラば。ち^テて。米^ヲ占^ムす。云^フも。詳^カか。依^ル祿^トど。信^濃。因^テ諏^訪。神^社
おて。正^月十五^日。神^前は。竈^ノ戸^ヲを。免^テて。金^ヲお。小^豆粥^ヲを。煮^ク
て。蘆^ノの管^ヲを。五^六寸^許。お切^テて。作^リて。と。作^ル物^ノの限^ハ此^ノ印^シ
る。其^ノ金^ヲお。入^レて。其^ノ事^ヲを。掌^ル禰^宜。傍^ニお。居^テて。箸^ヲを。も。て。其^ノ
管^ヲを。出^シ。其^ノ中^ニ。米^粒の。入^レ。と。依^ル状^ハに。依^テて。其^ノ物^ハ此^ノ豐^凶を。

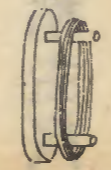
ト^クふ。此^ノを。筒^ノ粥^ハ此^ノ神^ノ事^トと。云^フぞ。是^ハ若^クは。米^ヲ占^ム此^ノ名^ノ殘^ルお
を。非^ジじ^ウ。但^シ此^ノ神^ノ事^ハ。諸^ノ因^ノの。古^ノ社^ハも。行^ハふ。外^ニあ^ラる。と
石^卷。神^社。河^内。因^テ。神^社。を。始^メて。後^ニ。因^テ。比^古。神^社。參^河。因^テ
中^ニ。上^野。因^テ。神^社。を。始^メて。後^ニ。因^テ。比^古。神^社。參^河。因^テ
お^キて。年^々。其^ノ下^ニ。粥^ヲ占^ム。此^ノ豐^凶を。印^シて。普^クく。農^人お。與^フ
ふ。第^一。由^リ。此^ノ物^ハ。荒^レび。を。鎮^メむ。此^ノ言^ハ傳^ハり。と。ぞ。此^ノを。伊^邪。那^作
美^命。の。火^ノ神^ハ。此^ノ荒^レび。を。鎮^メむ。此^ノ言^ハ傳^ハり。と。ぞ。此^ノを。伊^邪。那^作
物^ハ此^ノ種^ノを。貯^ル。牙^ハお。く。よ。必^ズ。有^ル。げ。ある。事^ハあり。此^ノを。用^フ。此^ノ神^ノ
農^ノの。云^フ。を。め。思^ハひ。合^ハは。る。お。由^リ。有^ル。げ。ある。事^ハあり。此^ノを。用^フ。此^ノ神^ノ
事^ハ何^レ。此^ノ。小^豆。粥^ヲ。入^レ。さ。依^ル。も。數^ハあり。と。筒^ノを。竹^ヲを。用^フ。此^ノ神^ノ
あり。粥^ヲも。小^豆。粥^ヲ。入^レ。さ。依^ル。も。數^ハあり。と。筒^ノを。竹^ヲを。用^フ。此^ノ神^ノ
餘^ハ。船^ノ人^ノお。ど。の。物^ハ。此^ノ米^ヲ占^ム。と。云^フ。事^ハあり。其^ノを。風^ノ波^ノの。難^ク
ふ。逢^フ。海^ノ上^ニ。お。漂^ヒ。方^ノ角^ヲを。失^ヒ。と。云^フ。事^ハあり。其^ノを。風^ノ波^ノの。難^ク
む。と。伺^フ。業^ヲ。免^レ。其^ノを。ま。扱^テ。方^ノ角^ヲを。幾^分。お。入^レ。と。伊^勢。の。大^御。神^ノ
書^ハ記^シ。て。聞^ク。と。お。し。置^テ。白^米。一^升。外^ニ。お。入^レ。と。伊^勢。の。大^御。神^ノ
お。置^テ。そ^レ。此^ノ米^ヲ。上^ニ。お。件^ノの。聞^ク。を。免^レ。と。伊^勢。の。大^御。神^ノ

○古史傳十九 ○四十

御祓箱を其上ふかざし能く祈念まむ其闈一其御祓
よおくを取て御誨と心得るおとあり此を米占といふ
と云り船中よ限らば餘事よ付て伺ふ御驗有ゆせいで
此事ハまぢ如此強説を爲おまどめ此時必しも右の占
事どもを行ひとすとは定はらば太非を更おめ餘ふ
め古むト事數ありしうむ何トふても有はし○猪馬を
既ふ出とす雞を次段ふ八千矛神の御歌ふ爾波都登理
迦那波那久と見え万葉よを家鳥可雞とも庭津鳥可雞
をも詠す縣居翁説ふ雞は人此家庭ふ栖て名を加那と
云故ふ家津鳥庭津鳥おど此語を冠らせと依よて雉ふ
野津鳥と云が如し神樂歌ふ庭鳥をかなろと鳴怒と歌

ふよ依るふ彼が鳴聲もて迦那とを呼おす加り理くぞ
鳴はるよ鴈加良くと鳴もゑよ鳥を云如き類何ぞし
物ふも多し此うけを家雞の字音此様よ云人あり此の
可雞と書したやおぎを楊奈伎う久を鳥梅とぞ有す猶
書るよ同くとす來る字を借とるのみあり
次段八千矛神の御歌此下ふ注に師説を見はし○解を
意を得て那基斯と訓べし令和す○依を麻爾麻と訓
はし○奉謝を麻袁志賜布と訓む即田人ふ牛肉を食し
久給する罪穢の怠を謝し給ふれゆ○實吾意也去を崇
神天皇卷ふ此天皇之御世役病多起人民死爲盡爾天皇
愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯於御夢曰是者我之御

心云く。垂仁天皇卷ふ。於太北占相而求何神之心爾崇出
雲大神之御心也。とあるを始終數所不見えと云。委く天
皇卷ふ注ふ。○麻柄アサガラ。麻の皮を取らば柄あり。○持カ。龍
田風神祭祝詞ふ。比賣神ふ奉物此中よ。金能持タリとある處
の加茂翁考よ。大神宮式よ。金銅加世比二枚。長各九寸六
分。万葉六ふ。をと然らぐ績麻ウミ繫カクとふ鹿背之山を詠みし
山を因史イニシ。梓山を書しおどを見ゆふ。梓は績ウミ芋を懸る
器と聞也。加世比といふ。手五寸六分のあむ。今田舍女此ツク
車ル懸ルと係ルを篋ツクへ巻取をかそふと云ひ。然せし系ツク
加そひ糸と云ひ。其糸を煮る粘水ネリを芋ウがせ粘ネリといふ。然



らば彼篋ツク此系ツク引懸る物字。梓と云はし。其状を。
かくの如し。此を近世キニセふ。女此手メねさを書し物の中ふ見
也。誠よちぞ有アきと云ふ。ま谷川氏説おも元正天皇
俗ソコ荷カふも加世カセふもあぞ云ふ。糸イト一ヒト梓シラカシ卷マク糸イト器ウツ也ナリと云ふ。此コノ義タテマあ
るル。加世カセ岐キと云器ウツあり。世ヨ渡ワタのミさサをカ世セ岐キと云ふ。此コノ義タテマあ
具ツグも。職シヨク人ヒト哥カ合カよ。加世カセぎギと云ふ。所トコロ名ナもあり。持カ
弄ウツの俗ソコ字ジふて。聖ホウ武ブ紀キと云ふ。モテアソブと云ふ。此コノ字ジのミあ
て偏ヘンを木キよも手テふも相通ツトはして書カクこと。此コノ字ジのミあ
例レイいと多オホう。新ニヒ撰セン字ジ鏡カガミふも。梓シラカシ加世カセ比ヒと云ふ。然シカれど
舊コウ訓クニふ。カセギと云ふ。今イマもカセギと云ふ。古コめさサも云
けむ。持カ之ノ。舊コウく加世カセ宜イと訓クニふ。依ヨはし。加世カセをカク具ツグ宜イ
詞コトバあ。ちて加世カセ具ツグとは加世カセ比ヒよ。芋ウをカク持カ繫カクるとし。此コノ書カク
ふ。あまど。眞マコト字ジ伊勢物語イセノモノガトふ。く。○以其シテ葉ハ拂ハラ之ノとは麻アサの
り。う。牙ウしをカク持カ返マゼとも書カクとめ。○

葉をもて拂子也。○天押草ハ本草和名。玄參和名
於之久佐と。是れらるる。和名抄字鏡も同じ。天とは
天日蔭天吉葛アサヒカゲ。アサヒヨサヅラの天アサと同じ。押之とは虫カ枯し損ソク子
は苗を押し直し廻るを云べし。袖中抄ふ。謂押直虫喰ウツ云々
也。○烏扇。和名抄。本草和名とも。射干一名烏扇。
和名加良須阿布岐カラスアブギと。扇之也。此草扇の状似と
る故。其葉をもて。苗付ある虫を扇アブげと。或人云
御田植の時。檜木よて檜扇を作り。宝珠を赤く書とる
を以て。苗を扇アブげむ。稻を虫食ウツべといふ。此遺意あり。と
云。然も。○溝口ミヅグチは。其田の溝口ミヅグチもど。前小田人。牛肉を
喰ウツ子ウツは故。田も稻も汚ウツるを怒りて。其を好む稻虫ウツ残

放給へる。今は如此牛穴ウツ。溝口ミヅグチも置きと。誨給ふ。神
此御意を。知法ウツのら。試ウツよ云々。溝口ミヅグチも。田水の落流
所ある故。其處ウツ此穴を置て。虫を集めて流さむ
此御慮ウツも。○作男莖形ウツ而加之男莖ウツは。舊く袁婆斯良ウツ也
も。袁婆斯ウツとも。袁婆勢ウツとも訓。和名抄。房内經云。王莖
男陰ウツ也。楊氏漢語抄云。廩ウツ破前ウツ一云。麻羅ウツ今按。王篇。廩ウツ也。何。何。
太秦牛祭。文此病名。大間ウツま。間風ウツもど。何。靈異記。小
開字を万良ウツと訓。和名抄。俗人或。以此字ウツ為男陰。以開
の俗字ウツある。新猿ウツ祭記。開大。而。然ウツま。男ウツ會。二名
云。長八寸。太四伏。云々。とも見也。然ウツま。男ウツ會。二名
何。似ウツ多れ。麻羅ウツ本語。麻宇羅ウツも。此は男女ウツ通

る稱ある事。既よ注るが如くおまむ。少異あり。第十九段の傳見る。
波勢とは。男莖の舊訓。袁婆斯と有を思ふ。男柱は。
義と聞ゆまむ。波斯は轉れる。あ依る。柱を波斯良と云。
れ。語ある由。第五段の傳よ注る。如し。谷川氏は。神
代紀よ。陽元陰元とある。依て。陽元形の義ありと説へ
まど。信が。然依て。神代紀ある。元本。古事記に
如く。成餘之處。不成合之處とやう。有る。むを。撰者のさ
強て。加。後世乃訓あるべし。儲は。俗よ。男根を閉
能古と云は誤あり。其を和名抄ふ。陰核。俗云。篇乃古。刑徳
教云。丈夫淫亂。割其勢。勢則陰核也。とありて。陰囊の中あ
依。謂ゆる。睪丸を云ふ詞あるをや。陰囊も同抄ふ。俗云。布
久利とあり。凡て和名抄ふ。此等の名を俗云とあまむ。皆

古言れるを。漢名を雅と。後世此心を以。かく云るも
此あり。方葉十六。尺。度。娘子。美。貴。人の。と。む。を。む。
ば。坂。門。ら。し。角。乃。布。久。礼。よ。あ。む。ひ。相。お。む。と。詠。る。角。乃
布。久。礼。を。男。莖。を。云。あ。ま。む。と。布。久。礼。と。云。語。を。會。囊。小。由。何
ゆ。て。聞。也。桑。家。漢。語。抄。ふ。陰。莖。志。毛。く。燈。里。と。有。て。奈。ち。て
部。祕。授。抄。を。引。て。下。髻。の。義。を。云。牙。め。不。審。き。説。あり。ち。て
本書。此。所。よ。是。所。以。厭。其。怒。也。といふ語を註さまむ。依
て。廣。成。宿。禰。の。意。あり。如。此。去。る。事。を。御。年。神。の。怒。を。和。さ
む。と。依。依。厭。あり。と。云。義。と。通。也。ま。む。此。事。や。が。て。御。年。神
此。御。誨。れ。ま。む。然。る。義。よ。は。有。は。む。じ。く。決。然。て。虫。れ。去。ら。せ。き。
淡。き。由。何。る。禁。厭。術。ある。は。な。ま。む。と。其。由。い。ま。む。思。得。也。訓
抄。よ。笠。島。の。道。祖。神。此。陰。相。を。好。○。慧。子。は。都。須。能。美。と。訓
み。給。ふ。事。あり。あ。む。由。ある。う。

ほし。本書ふ。古語以薏苡。都須と註さま。新撰字鏡。薏苡
子。玉豆志。ま。苡。玉豆志。和名抄。兼名苑。云。薏苡一名芋
珠。又作蕃。和名豆之太萬。とほる是。あ。さ。ま。と。今。此。を。都
須。太。万。を。云。を。
び。さ。て。本。草。家。の。説。ふ。薏。苡。を。俗。よ。四。国。麥。と。も。弘。法。麥。と
も。云。ふ。麥。此。如。き。家。あり。て。穀。ハ。柔。ふ。て。仁。大。あり。是。謂。也
る。薏。苡。仁。あり。ま。と。今。都。須。太。万。と。い。ふ。物。を。川。穀。と。い。ふ
物。よ。て。薏。苡。と。同。類。あ。ま。ど。別。あり。時。珍。木。艸。ハ。苡。珠。子。を
云。ひ。救。荒。本。艸。せ。云。物。よ。て。草。珠。子。と。称。ふ。穀。ハ。い。を。固。く。
仁。い。と。少。き。物。あ。り。俗。よ。て。ゴ。玉。せ。い。ひ。て。緒。よ。通。して。
禪。あ。ぞ。ふ。び。る。物。れ。ゆ。此。ハ。都。須。太。万。よ。て。非。後。と。古。を。同
類。の。草。あ。ゆ。故。り。薏。苡。を。も。川。穀。を。も。云。は。て。都。須。太。万。と
云。る。あ。○山椒は。本書ふ蜀椒とあ。和名抄。蜀椒本草
依。る。し。註。云。生。蜀。郡。故。以。名。之。和。名。奈。留。波。之。加。美。一。云。不。佐。蔓。椒。
以。多。知。波。之。加。美。一。云。保。曾。木。也。見。え。本。草。和。名。蜀。椒。陶。景。註。云。出。蜀。郡。

一名大椒。和名布佐波之加美。と此み。蜀。漢。土。ふ。て。も。と
れる。故。り。蜀。椒。と。云。由。あり。皇。国。ふ。て。舊。を。り。何。所。も。在
し。物。あり。然。る。小。物。あ。り。名。は。ま。ど。此。物。よ。字。を。ば。作。ら。ざ
り。し。故。り。彼。国。字。を。用。ひ。て。蜀。椒。と。神。名。式。ふ。但。馬。国。氣。多。
書。よ。ぞ。有。り。依。次。あり。胡桃。も。同。し。郡。獨。椒。神。社。大。名。神。ほ。正。氣。多。郡。獨。椒。神。預。官。社。貞。観。十。年。十
二月。廿。七。日。從。五。位。下。蜀。典。藥。式。云。但。馬。国。蜀。椒。栢。子。仁。各。
一。斗。斎。宮。式。ふ。櫻。椒。油。ホ。ソ。あ。ど。見。也。け。て。波。士。加。美。と。は。
神。武。天。皇。比。大。御。歌。ふ。見。え。て。薑。此。こ。を。あ。ゆ。ぐ。彼。を。根。を
用。ふ。依。り。對。へ。て。那。流。波。士。加。美。と。云。れ。り。杓。よ。對。了。て。瓢
と。い。ふ。類。あり。布。佐。波。之。加。美。と。云。を。實。比。總。や。う。あ。ゆ。故。ふ。云。へ
り。と。聞。也。波。士。加。美。と。云。名。の。意。を。神。武。天。皇。の。大。御。歌。比。下。ふ。注。べ。し。○吳。桃。を。本。草。和

名、胡桃博物志張騫使西域還時得和名久留美見之故名胡桃出七卷食經。

和名抄も字鏡ふ。考、吳桃也。久留彌とあり。留彌ともあり。

正、さて吳桃とぬ胡桃ともあり。通音あり。然れど漢土に

は舊無。正し木あり。御国ふは神世とゆ有り。然るも

をしも書る。此木ふ當る字を作。鹽は謂ふ依堅鹽あり。

らで有り。故あり。蜀椒も同じ。○傳見るべし。○

班。和加知と云ぐ如し。○年穀豐稔矣。多那都母能由

多加爾美能理伎と訓法し。○此今とは廣成宿禰の時を

いふ。本、書ふ。此、神祇官を云語あれど如此して御年、高

田、白翁が節解ふ。謂ふ所遺十一也。と云ふは、でふて。古

語拾遺を作る意義終れ。然るも此一段を終ふ載とほ

上、段くふ合ざは事あるを。是を神世。大己貴命。小彦名、

命の遺法禁厭の術あり。總て禁厭の法。是は此道理あり

は由。如此と云ふとハ、蝗虫を除去。白猪、白馬

あどを供了て祭。麻柄、押草れどの事。何ある理有て如

此に云ふと。測知は、うらぬ神祕あり。今時種々の厭此

も多し。然れども其効あちまらぬ。奇妙。さて此一段蝗虫

此田を損害ふこと。生民の重死災あり。穀物をもて命を

養ふ人あまらぬ。此術を以て。蝗虫此災を除去。あと大切の

事あり。廣成、宿禰。此方術を傳へ居て。後世ふ絶て傳ら

ざらむ事を憂ひて。書の尾に記し遺して。末世に傳へむ
事を欲せ依れ。序文に。愚臣不言恐絶無傳とある。よて。
宿禰此意趣見る。此事此書此外に見え。びせ云。依は。
實然る説ありし。○以白猪云。之縁也。此を毎年此二
月四日祈年祭。奉ら依。事あり。四時祭式。其祭神等。
ま。供物れど。委く載され。とる中。御歳社。加白馬白猪
白雞各一と見え。其祝詞。御年。皇神等能前爾白久。羊を
給ふ神。大。年。神。御年。神。若。年。神。を。更。あり。此。段。に。御。年。神。
此。御。子。と。も。有。れ。む。あ。ち。其。御。部。の。神。多。う。と。聞。也。故。等。
と。云。皇。神。等。能。依。左。志。奉。年。考。云。依。志。は。神。魯。岐。の。美。麻。
あ。ら。む。是。も。御。年。を。掌。守。ま。い。神。等。の。其。御。年。奥。津。御。年。乎。考。
ま。美。麻。命。に。依。奉。て。成。幸。子。給。ふ。を。い。ふ。云。

五穀の中。稻を最末に熟る。故に。奥と云へり。同じ。稻よ
て。晚。成。る。を。奥。と。云。ま。と。遅。き。事。を。も。万。葉。小。お。く。て。あ
ら。む。と。云。依。手。肱。爾。水。沫。畫。垂。向。股。爾。泥。畫。寄。氏。取。作。年。奥。津
御年乎。畫。を。二。と。も。攪。の。意。に。借。れ。り。手。の。肱。を。あ。あ。ひ
へ。向。股。は。第。三。二。段。り。出。り。泥。の。こ。と。を。第。四。段。に。注
る。と。て。田。に。泥。水。よ。漬。を。ゆ。て。勞。か。く。形。状。を。云。へ。る。古。文
に。八。束。穂。能。伊。加。志。穂。爾。考。云。八。束。穂。を。彌。握。り。盛。小。足。て。勢
ひ。嚴。そ。う。ある。穂。を。い。ふ。故。に。御。紀。皇。神。等。能。依。左。志。奉。者。
依。志。奉。者。を。皇。初。穂。乎。波。其。秋。の。新。稻。を。先。神。に。奉。る。小。穂。を。此
美。麻。命。に。依。奉。り。初。穂。乎。波。奉。る。を。初。穂。と。云。ふ。千。穎。八。百
穎。爾。奉。置。氏。考。云。穎。を。稻。に。穂。あり。神。に。奉。る。小。穂。を。此
に。挂。穂。と。云。是。あ。り。御。酒。汁。米。和。稻。荒。稻。あ。ど。云。た。皆。こ。の
千。穎。八。百。穎。を。い。ふ。れ。し。分。依。物。あり。江。次。第。も。本。穎。荊。謂
之。穎。切。穂。謂。之。懸。閉。高。知。餘。の。祝。詞。に。懸。上。と。も。あ。り。さ。て。懸
之。穎。と。い。ふ。懸。閉。高。知。餘。の。祝。詞。に。懸。上。と。も。あ。り。さ。て。懸

酒釀む缶あり古酒をバ釀とる懸あがら奉る故
よ此言あり高知の高其懸のあけ此高きを云知た敷
あり宮柱太知とも宮柱懸腹満雙氏上よた懸のさけ高
太敷とも云よて知べし懸腹満雙氏きを云あくよを其
グ腹よ酒を満足と云且懸汁爾母穎爾母稱辭竟奉年師
此多き由りて双と云り汁爾母穎爾母稱辭竟奉年師
汁と酒字云即上の懸閉云く是あり穎と上此千穎
八百穎あまあり然まぞ汁はも穎もと云るは上の二
種をさして云へり然まぞ汁はも穎もと云るは上の二
中よ此あるを語調ひて現く聞えと依を他祝詞あ
て云現聞え難し九大野原爾生物者甘菜辛菜考云甘菜
葡萄野類あど種くあり青海原爾住物者鰭能廣物鰭
能狹物鰭は大小の魚あり奥津藻菜邊津藻菜爾至万氏
爾考云海よてた彼方を於伎といふ於久と云よ同じ陸
をぞ母波を云ふり然まぞ御服者明妙照妙和妙荒妙爾考
母と此み云ふた畧あり御服者明妙照妙和妙荒妙爾考

五色此絹布を奉れど色をもて照る明ると云織の細き
荒きをもて荒和と云也妙を借字ふて万葉あぞよ名
と書した正字ありけて多倍は此類の物を總ていふ名
を今京とありて麻の布を細きを和考と云り式即是あり
言は古よて物を異ふおれるこを多しと云り別と免は
違ふ稱辭竟奉年考云こ此稱辭竟奉年此上予か此奉置
處文の小御年皇神能前爾考よおを殊よ穀よ依給ふ神
段あり師云此御年皇神とあるを申は故ふ等と云と
何正師云此御年皇神とあるを申は故ふ等と云と
郡葛木御歳神社名神大月次相嘗新嘗と何大和国葛上
然るを考よ高市郡ある御歳神社大歳神社を出して云
れよ依を達へり高市郡あるを小社の列おてさむらゆ
重く祭給ふは白馬白猪白雞也よ本文よ見種く色
物乎備奉氏右小奉云御服御酒穎海山の物どもを皇
御孫命能宇豆能幣帛乎種くの献物を總て美氏具良と

の下よ備奉と稱辭竟奉久登宣と何也。此は祝部等稱唯云言を略しと宣聞せ給ふを。さて貞觀儀式も此祭此條よ京承賜を正畏む意あり。職貢白雞一雙近江国豚一頭を見えと正。然まむ神世此故事の本也。本文小見えとる如く。白猪あるを。此は得ると祀故よ。後ふは豚よ替て獻ま依れり。然まむ聖武天皇此処小詔和買畿内百姓私畜猪四十頭放於但し其を近山野令遂性命と何る番猪を豚ありと正。江国と正獻し免給牙依由緒を詳れらば。元記ふも仁平右少辨資長申云。祈年祭猪近江国未進者云。九日近江目代俊弘申云。郡司申云。祭前十餘日狩猪不得之。連日狩獵于今無得。先例如此之時用代物見北山抄承平四年六月月次祭馬代進調布八端任彼例可以調布八端為猪代。之仰了。以同趣仰史と見也。さておの台記此文は依まむ。後よをまよ野猪を代て獻れる。其をさ牙不當年ふハ

得ざ正し趣あまバ其と正遂よ。今世此如く献らぬ事とを成ふらむ其たと神の御心あることと言も更あり。ちて片巫肱巫ぐ。大地主神ふ教奉りて。此三種此物を獻正る。御怒を解し給牙と白せ依を思ふよ。御年神を此物等を好給ふと通えと正。其は加茂翁説の如く。馬は餘此祝詞よ。馳出物止御馬也云て。獻ら依く字思牙。神の乘坐と免。雞を時を告る故小奉正。猪ハ御贄此料小ぞ有依。加茂翁云。總て白を用ら依く。止雨祈よ。白馬を奉る。おらむと云れき。然も有らむ。又按ふ。鳥獸の幽界お入るるを多く白く化れる。おやと思布由何り。然れ白きを神よ。近き故よ。好給ふ。抑神世と正。獸肉を贄とよは非じ。猶とく考ふ。世し。せらる事は。末於神代紀よ。月夜見尊。高天原よめ。保食神の

許ふ到坐る處ふ。保食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海
 則齧廣齧狹亦自口出又嚮山則毛麕毛柔亦自口出夫品
 物悉備貯之百机而饗之是時月夜見尊忿然作色曰穢哉
 鄙哉寧可以口吐之物敢養我乎迺拔劔擊殺之何る毛麕
 毛柔ハ鳥獸のおとれゆぐ今世此心もて見まむ其を饗
 奉れるを怒坐る如く聞ゆまむも然ま非び吐出ぬ物
 おゆ故ふ怒坐るあ也然まむ大凡の神等ハ獸をも食け
 むこぞ疑あし。然らでハ保食神此を獻也給ふべき由
 穴を食し給へるハ御過失あれど其ハ此段ハ大地主神田人ハ牛
 も食ハむゆあ也し故よかふる御過失も有ハ也末子火
 遠理命の山佐智毘古とて毛鹿物毛柔物を取給子ゆ

ぞ有も食給むむ料あるべし。そハ火須勢理命の海佐智
 を取給へゆぐ食物の料あゆ故人世もあ也ても仁徳天
 皇卷ある菟鹿野の鹿此故事崇峻天皇卷ふ天皇此大御
 前ふ猪を獻れゆまも天武天皇の御世も牛馬の肉を食
 ふおと哉禁給へる事あどを思ふも猪鹿ハ憚あき趣あ
 れむ天皇と也下も至までも猪鹿を食ハむこと言ふ
 も更れ也。此外ハ天皇の御獵し給へる事ハ今數子も盡
 食物の料ありハむ犬養あど云姓あも御獵の犬を養
 子氏人聞えたりゆあも万葉十六ハ八重疊平羣山ハ
 四月と五月ハ間ハ葦獵仕る時云佐男鹿此來立歎
 うく頓ハ吾ハ死べし王ハ吾ハ仕子云く吾穴者御奈
 麻須波夜志吾伎毛母御奈麻須波夜之云く然まば神ハ
 あど有を以ても天皇命此食ハむこと著し

も悉く獻る例ありしと思ふ。祝詞式を見まむ。毛鹿物毛柔物を獻る由を白せ候。廣瀨大忌祭。龍田風神祭。道饗祭。遷却崇神祭。おの四祭、此詞を以て外に奉る候。おとぬきは別ある由ありと聞え。此四祭は此み毛鹿物毛柔物と所思候おと考す之候。況て天照大御神へは延曆内説あれどこよむ洩し候。宮儀式延喜太神宮式建久年中行事を始免。其餘の書おぬ。毛鹿物を獻れる例あり。神子悉く獻る例ありむ。式あるは此大御神よむ必殊お獻る代とちて戴奉り。川瀨を渡り給むとひるよ。鹿穴流相しうば穢惡と詔ひて渡り坐さび。忌詞を定給り候七言此

中にお穴稱菌ぞ云こと有る依ても。大御神は甚く惡ひ給ふこぞ知られし。此等のこと委くは伊勢兩宮御鎮座部類考よ注ふを見べし。此大御神を古語拾遺に。天照大神者。惟祖惟宗尊無二。自餘諸神者。乃子乃臣孰能敢抗と記さき。玉葉に。我朝之習。以伊勢事爲本と宣り候如あまむ。此大御神の惡ひ給ふ故よ。其大御心を本とて。稍くお餘諸神も。獻らぬ事お定給りしと所思也。其を貞觀儀式に。大嘗祭儀に。食穴限りと見え。日を一本よ月と作るを誤あり。此を穴を食とる一日を限りて。神事よ奉仕さる由あり。延喜神祇式臨時祭の處に。凡觸穢惡事應忌者云く。喫穴三日。此官尋常忌之。但當祭時餘司皆忌也見也。此官とて神祇官を云ふ。文

保記ふ。猪鹿食、人禁忌百日。同火、人廿一日。又相火七日。不
參大神宮とあり此を何きも神事預る人々。司人ぬち
此事よて。平人此事ハ非茲ど。此等の文を見通して。漸
漸小重く忌來れるよとを知はし。天和三年。兩宮をり
奏上れ依假服令よも。鹿火。馬牛豕羊猪犬麋食鹿肉、人百
日禁忌。合火、本人者廿一日禁忌。廿一日穢人相火七日禁
忌。七日穢人相火當日禁忌。當日穢人相火沐浴とあり。此
顯よ人の定さるよと有まど。案を幽よ大御神の御定さ
る故り。餘諸神も從ひまして現ふ其定免れ出來れるよ
ぞ有る。餘諸神も從ひまして現ふ其定免れ出來れるよ
ふべし。古今著聞集よ。大学寮の廟供よ。昔を猪穴鹿穴
をも供牙乃依を。或人此夢よ。尼父此宣はく。本國おてを
進免しうども。此朝お來りし後。大神宮おはし坐は穢

食供ふべのらびと有るよ依て。後よを供せびありよ
る也と有るを思ふ。尼父を孔丘のことあり。彼を戎
人ある故よ。釈奠といふ其祭。昨よ猪鹿れを供る
を。大御神の惡ひ給ふことを畏みて。辭さる由あり。戎人
此神とあまの尻ら。皇朝よ來て。大御神此御定を畏免
む。況て皇國よ本より御坐せる神ハ。其大御定よ從まし
らむ。こぞ言まくも更あり。斯て孔子の此託。お依れ也と
通えて。後よを釈奠よも。雉水鳥おどを代用ふるよとく
は成よ。儲かく大御神の惡ひ給ふ故り。神廷よは依御定
け也。此出來おく。天皇よも遂よ食給をまふ也て。御齒固此供
御よも。猪穴鹿穴ありしを。後よは鳥よ代らまよ也。然れ
む下よは此定を法令給をぬよも有れ。神奴あらむ人を
更あり。凡人あらむ加らふ。神の御國よ。神此御民と生ま
ぬらむ者此いと上れる世をままきかくはま。今現よ。大

無をもて。如此を推量り奉る。又神も鳥獸の類。凡て活物を奉れるハ。皆活あがら。用ひ給へる趣。其を殺して。食給ふこと。を絶てあき事と聞也。然も終よむ。鳥類をも忌給ふ。瑞穂。國の奥津御年を飽まで給て。御靈よ依て。瑞穂。國の奥津御年を飽まで給て。上の。甘菜。辛菜。鱈。此廣物。鱈。此狭物。奥津藻菜。辺津藻菜。よ至るまで。好ミト。取用ひむ。何の足を。燃事。う有らむ。又毛の柔物を用ひむ。然る。左も右も。獸肉。此忌。遠き。云も。更あま。ど。其忌。給ふ。御由。縁を。及。ふ。限。ゆを。考。牙。知ら。ま。布。し。き。事。よ。て。是。や。ぐ。て。其。御。惠。ふ。報。ひ。奉。る。百。千。ぐ。一。とも。云。ば。く。や。

爾八千矛神將婚高志國出意
支都久辰爲命出子俾都久辰

爲命出子沼河比賣
平ノミコトノミコヌナガハヒメヲ
亦云沼名
宜波比賣

命。イデマシシトキニイタリソノヌナガハヒメノ
幸行出時到其沼河比賣出

家而歌曰夜知富許能迦微能
イヘニテウタヒタハクヤチホコノカミ

美許登波夜斯麻久爾都麻麻
ミコトハヤシマクニツマ

岐迦泥氏登富登富斯故志能
ギカネテトホトホシシノ

久クニニ邇ニ邇ニ佐サ加カ志シ賣メ遠ヲ阿ア理リ登ト伎キ
加カ志シ氏シ久ク波ハ志シ賣メ遠ヲ阿ア理リ登ト伎キ
許コ志シ氏シ佐サ用ヨ婆バ比ヒ爾ニ阿ア理リ多タ多タ
斯シ用ヨ婆バ比ヒ邇ニ阿ア理リ加カ用ヨ波ハ勢セ多タ
知チ賀ガ遠ヲ母モ伊イ麻マ陀ダ登ト加カ受ズ氏シ淤オ

須ス比ヒ遠ヲ母モ伊イ麻マ陀ダ登ト加カ泥ネ婆バ遠ヲ
登ト賣メ能ノ那ナ須ス夜ヤ伊イ多タ斗ト遠ヲ淤オ曾ソ
夫ブ良ラ比ヒ和ワ何ガ多タ多タ勢セ禮レ婆バ比ヒ許コ
豆ヅ良ラ比ヒ和ワ何ガ多タ多タ勢セ禮レ婆バ阿ア遠ヲ
夜ヤ麻マ邇ニ奴ヌ延エ波ハ那ナ伎キ佐サ怒ヌ都ツ登ト

理^リ伎^キ藝^ギ斯^シ波^ハ登^ト與^ヨ牟^ム爾^ニ波^ハ都^ツ登^ト
理^リ迦^カ祁^ケ波^ハ那^ナ久^ク宇^ウ禮^レ多^タ久^ク母^モ那^ナ
久^ク那^ナ雷^ル登^ト理^リ加^カ許^コ能^ノ登^ト理^リ母^モ宇^ウ
知^チ夜^ヤ米^メ許^コ世^セ泥^ネ伊^イ斯^シ多^タ布^フ夜^ヤ阿^ア
麻^マ波^ハ勢^セ豆^ヅ加^カ比^ヒ許^コ登^ト能^ノ加^カ多^タ理^リ

其^ゴ登^ト母^モ許^コ遠^ヲ婆^バ爾^コ其^ニ沼^ソ河^ノ日^ヌ賣^ナ日^ガ賣^ハ
未^イ開^ダ戶^ヒ而^ラ自^テ内^ヨ歌^リ曰^ウ夜^キ知^ウ富^タ許^ハ許^ク
能^ノ迦^カ微^ミ能^ノ美^ミ許^コ等^ト怒^ヌ延^エ久^ク佐^サ能^ノ
賣^メ邇^ニ志^シ阿^ア禮^レ婆^バ和^ワ何^ガ許^コ許^コ呂^ロ宇^ウ
良^ラ須^ス能^ノ登^ト理^リ敘^ゾ伊^イ麻^マ許^コ曾^ソ波^バ知^チ

杼^ド理^リ邇^ニ阿^ア良^ラ米^メ能^ノ知^チ波^ハ那^ナ杼^ド理^リ
邇^ニ阿^ア良^ラ牟^ム遠^ヲ伊^イ能^ノ知^チ波^ハ那^ナ志^シ勢^セ
多^タ麻^マ比^ヒ曾^ソ阿^ア遠^ヲ夜^ヤ麻^マ邇^ニ比^ヒ賀^ガ迦^カ
久^ク良^ラ婆^バ奴^ヌ婆^バ多^タ麻^マ能^ノ用^ヨ波^ハ伊^イ傳^デ
那^ナ牟^ム阿^ア佐^サ比^ヒ能^ノ惠^ヱ美^ミ佐^サ迦^カ延^エ伎^キ

氏^テ多^タ久^ク豆^ヅ怒^ヌ能^ノ斯^シ路^ロ伎^キ多^タ陀^ダ牟^ム
伎^キ阿^ア和^ワ由^ユ伎^キ能^ノ和^ワ加^カ夜^ヤ流^ル牟^ム泥^ネ
遠^ヲ曾^ソ陀^ダ多^タ伎^キ多^タ伎^キ多^タ伎^キ麻^マ那^ナ賀^ガ理^リ
麻^マ多^タ麻^マ傳^デ多^タ麻^マ傳^デ佐^サ斯^シ麻^マ伎^キ毛^モ
毛^モ那^ナ賀^ガ爾^ニ伊^イ波^ハ那^ナ佐^サ牟^ム遠^ヲ阿^ア夜^ヤ

爾^ニ那^ナ古^コ斐^ヒ伎^キ許^コ志^シ夜^ヤ知^チ富^ホ許^コ能^ノ

迦^カ微^ミ能^ノ美^ミ許^コ登^ト許^コ登^ト能^ノ迦^カ多^タ理^リ

碁^ゴ登^ト母^モ許^コ遠^ヲ婆^バ故^カ其^レ夜^ソ者^ノ不^ハ合^ズ

而^テ明^{クル}日^ヒ夜^ノ爲^ヨ御^シ合^タ矣^ヒ

八千矛神此神の事を記せる。神代紀す。何の段ふも。大己貴命とあり。古事記に。前後何れ段ふも。首よを大國主

神とあるを。此段れみ八千矛神と記せるは。師説の如く。

歌此首ふ有依御名あまむあるは。○高志國を。師説れ

如く越國あり。出雲國神門郡あり。後ふ越前加賀能登越中。

越後れづ。分まれまども。歌あどよはれ不れは。越と

とむ例あり。但し此は高志をあるを。越後國れり。○意

支都久辰爲命。俾都久辰爲命。意支都俾都を。奥と邊りて。

親子を分とせと聞ゆれど。久辰爲の義ハ詳あらば。一本

良爲とあり。此は依らむ位。○沼河比賣。亦云沼名宜は。

師云神名式。越後國頸城郡。奴奈川神社。此地名あり。

神を祭れる。他神を知らぬ。和名抄。同郡。沼川。奴乃

郷河也。此地名也。然れば此も奴奈加波と訓べし。那を
る之の意あり。其右の和名抄よ。綏靖天皇の御名此
て知れし。凡て能多那と云る例多し。綏靖天皇の御名此
沼河も。書紀よ。淳名川や。作るふて思ひ定めてよ。此河
此あとの彼。ちて此御名は上比稻羽之八上比賣也。同例
也。○將婚む。用婆比爾と訓べし。此言即御歌ふ出と也。
○幸行は。師云伊傳麻志い。を訓べし。下の志を行賜ふを
云ふ古言也。天智天皇紀童謠ふ。伊提麻志と見え。万葉
八よ。伊而麻左自常屋あどあり。はと神代紀ふ。遊幸。崇神
天皇紀ふ。幸行ま。と所よ依て。來字臨字あど字も然訓ゆ。
行のみあらば。來をも云。今の俗語よ。行をぬ。來字も御
出あさると云と同じ。○万葉ふ。行幸と書る字みあ。美由

伎と訓ゆ。古言を知らぬ。非訓あり。何れも伊傳麻志と
訓てあ。を宜し。四卷よ。君之御幸乎とある。此みぞ。然
て訓あ。ときを。あ。御事の誤あり。と。加茂翁。あ。天皇ふ
此云。ま。し。信。然。ら。ざ。ま。む。通。え。ぬ。哥。あり。あ。天皇ふ
限らば。尊みて。誰上。ふも。云。依。こ。せ。れ。也。然るを。何。も。
天皇の出。坐。書。あ。ま。さ。る。字。を。他。よ。め。借。る。あり。凡て
古。て。文字。ふ。拘。え。ら。ざ。り。し。こと。是。ふ。て。も。知。べ。し。ま。と。常
よ。は。行。幸。と。書。を。古。事。記。よ。ハ。凡て。幸。行。と。の。み。書。ゆ。是。古
此。例。あ。る。よ。や。右。ふ。引。る。崇。神。天。皇。紀。ま。と。万。葉。三。卷。あ。ど
ふ。も。然。○歌。曰。は。宇。多。比。賜。波。久。と。訓。べ。し。○夜。知。富。許。能
書。也。○歌。曰。は。八。千。矛。之。あ。也。前。ふ。出。と。也。○迦。微。能。美。許。登。ハ。師。云。神
命。ふ。て。尊。稱。れ。ゆ。万。葉。三。よ。天。原。從。生。來。神。之。命。五。よ。多。良
十九。和。多。都。民。能。可。志。比。咩。可。尾。能。弥。許。等。六。よ。吾。皇。神。乃。命
味。能。美。許。登。あ。ど。あり。凡。て。上。代。よ。父。命。母。命。孀。命。妹。命
あ。ど。も。云。抄。さ。ま。む。自。詔。牙。依。は。免。お。ら。し。○夜。斯。麻。久。爾

は。八嶋囿まで。八嶋囿の中ふてと云意あり。○都麻岐
迦泥氏都麻才妻。麻岐才寛あり。神代紀も。寛囿此云矩貳
麻儀神武天皇御歌ふ。延衰斯麻加牟とあるも。將寛あり。
宇治拾遺物語も。人の妻まぐ者ありや云。中昔までも
いする言と見也。万葉七も。過往し人よ往卷目やもあど
も見。迦泥才。万葉も多し。不得と書也。さて。繼躰天皇紀も
也。日皇女云々の御哥。此と甚。○登富登富斯才。遠くああり。
くく似たり。考へ合さる。見。此言古書も。中昔の書も。他才をさく。出雲よ
見え。返りて。今世才。常いふ言あり。遠きを云。源氏物語總角卷も。うとてとちどく。あくの
遠きを云。みもてあさせぬ。万才云。但智。深くかし。あき
きあり。○佐加志賣才。賢才女あり。但智。深くかし。あき
と云。常も。さくし。らどちて。悪き方も。多く云。免れど
此才。さふ。何ら。あ。あ。愚あり。反も。て。ち。め。と。依。言。あり。

崇神天皇紀も。叡智仁徳天皇紀も。賢此云左河之士佐日
記も。あや人々。此も有らまど。けのあれも無る。はし。あれ
のとき。○阿理登伎加志氏は。有と聞而を延ある例の古
言れ也。○久波志賣才。麗女也云む。如し。宇流波志才。宇
正才。ありと。加。万葉十三も。鮎矣令。咋麗妹爾。ともあ
け詠也。はと古書どもも。細字をも。久波志也。訓也。水垣宮
段も。目微比賣也云人。名もあ也。○伎許志氏も。上此伎加
志氏と同じ。契冲云。伎加志氏と。伎許志氏と同じ。詞あまど
小さよ。ばひと云。ひと。聞食き。かし。免。通。えし。云。グ。如し。
ま。人。の。我。も。言。と。云。こ。や。を。も。伎。許。須。と。繼。體。天。皇。紀。の
云。へ。り。其。才。次。此。沼。河。比。賣。の。哥。み。見。也。

御歌よ。野^ヤ施^シ磨^マ俱^ク爾^ニ都^ツ磨^マ。祈^ギ哥^カ泥^ネ底^テ播^ハ屢^ル比^ヒ能^ノ哥^カ須^ス我^ガ
能^ノ俱^ク爾^ニ。俱^ク婆^ハ施^シ謎^メ鳴^ヲ阿^ア唎^リ等^ト。枳^キ底^テ與^ヨ慮^ロ志^シ謎^メ鳴^ヲ阿^ア唎^リ等^ト
枳^キ底^テ何^ニ也^カ。○佐^サ用^ヨ婆^バ比^ヒ爾^ニ。佐^サを眞^マふ通^トふ辭^ジあ。用^ヨ婆^バ
比^ヒを。万^{マン}葉^{ヤク}ふ結^ケ婚^{コン}と書^カ。靈^{レイ}異^イ記^キよ。伉^{コウ}儷^{レイ}與^ヨ波^ハ不^フともあ
也^カ。言^{コト}此^{コト}意^イハ。呼^{コト}よ。出^デとるあらむ。今^{イマ}世^セの語^ゴふ婦^メをとぶ
と云^{イハ}も是^{コト}あ。竹^{タケ}取^{トル}物^{モノ}語^ゴよ。やみの夜^ヨよもあ。か。し。こ。よ
よ。ば。し。と。云^{イハ}る。り。垣^ケ間^マ見^ミま。ど。ひ。何^ニ。牙^キり。さ。る。時^{トキ}よ。り。あ。む。
万^{マン}葉^{ヤク}十^{ジュ}三^{サン}よ。夜^ヨ延^{エン}為^ニ書^カる。も。正^{テイ}字^ジを。非^ヒ疑^ギ扱^キま。大^{ダイ}和^ワ
物^{モノ}語^ゴふ。故^{コト}武^ブ部^ブ御^ミ宮^{ミヤ}を。桂^{ケイ}の。み。こ。せ。ち。ふ。く。ば。ひ。賜^{ミツ}ひ。り。ま。
ど。あ。む。し。坐^ザざ。り。り。と。有^{アル}る。女^メの。方^{カタ}よ。り。と。む。ふ。と。云^{イハ}。
○阿^ア理^リ多^タ。斯^シ在^{アリ}立^タあ。お。は。即^{ソク}次^ジふ。和^ワ何^ニ多^ク勢^{セイ}禮^{レイ}
婆^ハとある事^{コト}也^カ。加^カ用^ヨ波^ハ勢^{セイ}を。前^{マエ}よ。あ。む。む。己^ミ命^{メイ}の家^カと
也^カ。発^{ハツ}出^デとるふを。云^{イハ}う。とも思^{オモ}えるま。

何^ニ。万^{マン}葉^{ヤク}一^{イツ}。埴^{ハニ}安^{ヤス}乃^ノ堤^{ツツ}上^{ウヘ}爾^ニ在^{アリ}立^タ之^シ。十^{ジュ}三^{サン}よ。嶋^{シマ}之^ノ崎^{サキ}邪^{ジャ}
伎^キ安^{ヤス}利^リ立^タ有^{アル}花^{ハナ}橘^{キバチ}乎^カ也^カ。○阿^ア理^リ加^カ用^ヨ波^ハ勢^{セイ}在^{アリ}通^トは
せり。ほと二^ニの阿^ア理^リを。万^{マン}葉^{ヤク}ふ有^{アル}通^トと云^{イハ}ふ詞^{コト}。卷^{マク}くふ多^タ加^カ
依^ヨ中^{チュウ}。蟻^{アリ}往^{カウ}來^{ライ}。六^{ロク}の卷^{マク}み見^ミえ。ま。と。三^{サン}。卷^{マク}
らむ。後^{ノチ}よ判^ハ官^{カン}物^{モノ}語^ゴを。前^{マエ}み。ハ。非^ヒ説^{セツ}あ。ら。む。を。思^{オモ}ひ。し。を。
委^イ免^{エン}ら。ま。て。舞^{マヒ}る。時^{トキ}也^カ。嚙^{アヒ}の。委^イ。吉^{キチ}野^ノ山^{ヤマ}の。僧^{ソウ}ら。よ。委^イ。
何^ニ。丸^{マル}の。跡^{アト}を。恋^{コイ}し。き。よ。何^ニ。う。で。離^リれ。し。面^{オモ}影^{カゲ}を。い。つ。此^{コノ}世^セ。
あ。り。を。忘^{ワシ}る。べ。き。云^{イハ}く。と。あ。る。を。思^{オモ}ふ。判^ハ官^{カン}の。心^{ココロ}多^タ。り。也^カ。
し。事^{コト}を。思^{オモ}ひ。寄^ヨて。う。と。へ。依^ヨり。て。案^{アン}ふ。も。蟻^{アリ}ち。ふ。虫^{ムシ}を。能^スく
歩^フ行^{コウ}く。と。り。名^ナよ。負^ネ。依^ヨ物^{モノ}と。思^{オモ}え。る。ま。ほ。と。有^{アル}待^{タイ}。七^{シチ}。卷^{マク}ま。と
む。蟻^{アリ}通^トと。書^カ。と。る。正^{テイ}字^ジあ。る。べ。し。ほ。と。有^{アル}待^{タイ}。七^{シチ}。卷^{マク}ま。と
え。見^ミ有^{アル}雙^{ソウ}爲^ニ。十^{ジュ}三^{サン}。有^{アル}く。と。云^{イハ}。依^ヨ有^{アル}ふ。て。然^{シカ}而^{シテ}在^{アリ}然^{シテ}而^{シテ}不^ス
被^レ在^ス云^フ。而^{シテ}在^{アリ}あ。ど。常^{ジョウ}ふ云^フ。言^{コト}あ。ま。ど。も。在^{アリ}云^フ。く。せ。上^{ウヘ}ふ

置オクおせむ。後世の語コトふ少オホき故コトふ耳ミミ遠トホく聞キコゆ免マフ也。然シカドまど
も。蟻アリの義コトおまむ難カタおし。お此コノ二ツの中ナカ孰シおらむ考カウはし。諸モト
此コノ句コトを。上ウヘの許ヨリ曾ソノと云イハ辭コトも無ナシく。まマと仰オホる言コトも非ヒぬ。み
下シタを勢セと。第ダイ四シ音ネもて絶ツまるハ古コノ長ナガ哥カの中ナカおある一ヒト
格カクあり勢セ下シタの婆ハハ字ジの脱ツと依ヨる。加カ茂モ翁ウ此コノ云イハまマの於オこ
何ナニらび万マン葉エフ二ニお天テン傳デン入ニル日ヒト刺シ奴ヌ礼レイ云イハく。まマと引ヒキ放ハ箭ゼン繁ハシ計ケイ
久キウ大雪ダイセツ乃ノ乱ラン而ニ來キ礼レイ云イハく。三サンお久キウ堅ケン乃ノ天テン所ショ知チ多タ延エン奴ヌ礼レイ云イハく。五ゴ
お周シュウ具キ斯シ野ノ利リ都ト礼レイ云イハく。まマと聖セイ尅ク伊イ乃ノ知チ多タ延エン奴ヌ礼レイ云イハく。五ゴ
こコ絶ツて。事コトの轉マる際サカイも上ウヘと云イハる。お伊イ乃ノ知チ多タ延エン奴ヌ礼レイ云イハく。五ゴ
去キ佐サ礼レイ麻マ加カ利リ伊イ麻マ勢セイ云イハく。おの勢セイも同ドウじ格カクあり。○多タ知チ
賀ガ遠エン母ボハ。大ダイ刀タウ之ノ緒コも免マフ也。能ノと物モノも例レイ多タし。万マン葉エフ此コノ加カ
非ヒ毛モ我ガ乎カと。緒コは身ミ小コ著シ佩ヘ料リョウ免マフ也。其ソノ状カタチ也。大ダイ神シン宮ミヤ式シキ
免マフ也。紐ヌ之ノ緒コあり。緒コは身ミ小コ著シ佩ヘ料リョウ免マフ也。其ソノ状カタチ也。大ダイ神シン宮ミヤ式シキ
神シン寶ホウ小コ玉タマ纏マキ横ヨコ刀タウ一ヒト柄カバ。柄カバ長ナガ七シ寸スン。鞘シヤウ柄カバ頭カバ横ヨコ著シ銅ドウ塗ツ金キン長ナガ三サン尺シキ六ロク寸スン。柄カバ頭カバ横ヨコ著シ銅ドウ塗ツ金キン長ナガ三サン尺シキ六ロク寸スン。

寸スン八ハチ分ブン頭カバ頂カバ著シ什シツ環ヱン一ヒト勾カウ著シ五ゴ色シキ組クミ長ナガ一ヒト丈シヤウ阿ア志シ須ス惠ヱ組クミ四シ
尺シキ柄カバ著シ勾カウ金キン長ナガ二ニ尺シキ。著シ鈴スズ八ハチ口ク琥コ金キン鉞ゼン形カタチ一ヒト雙スウ著シ緒コ紫シ組クミ長ナガ
六ロク尺シキ。まマと須ス我ガ流リウ横ヨコ刀タウ云イハく。雜ザツ作サツ横ヨコ刀タウ二ニ十ジュウ柄カバ云イハく。阿ア志シ須ス
惠ヱ著シ緋ヒ紺コン帛ヒト緒コ長ナガ九ク尺シキ。廣ヒロ二ニ寸スン。せセ何ナニるふて知チはし。拾シツ遺ヰ集シツ
神シン樂ラク歌カ小コ石シキ上ウヘふ依ヨるや壯シヤウ夫フの太タイ刀タウも加カれ。組クミ緒コ垂シて宮ミヤ路ロ
通カウむ。まマと物モノ名ナ小コをがハ此コノ橋ハシを免マフ也。歌カ筑チク紫シと也。此コノ
まマと來キまどおせむも免マフ也。太タイ刀タウの緒コ革カク此コノ端ヘみぞ何ナニる。貞テイ貞テイ
十六年ジュウロクネン檢ケン非ヒ達タク使シの請コトお依ヨて。横ヨコ刀タウ此コノ緒コ五ゴ位イ己キ上ウヘ同ドウ用ヨウ唐タウ
組クミ六ロク位イ己キ上ウヘ並ナヒ用ヨウ綺キ新シン羅ラ組クミ等トウと定テイられしこと。三サン代ダイ實ジツ錄ロク
小コ見ミ也。承シヤウ和ワ元ゲン年ネン制セイ囚ク獄ク司シ物モノ部ブ刀タウ緒コ。○伊イ麻マ陀ダ登トウ加カ受ジュ氏シ
用ヨウ胡コ桃トウ染ゼンと云イハく。も。続ツク後ゴ紀キ見ミ也。○伊イ麻マ陀ダ登トウ加カ受ジュ氏シ
未ミ解ケ而ニ免マフ也。万マン葉エフ十二ジュウニ小コ他タ因イン爾ニ結ケツ婚コン爾ニ行キョウ而ニ太タイ刀タウ之ノ緒コ

毛未解者左夜曾明家流。こを此歌の意を約て詠る歌あり。○於須比遠母也。倭建命此段。美夜受比賣歌。和賀祁勢流意須比能須蘇爾云々。應神天皇卷女鳥王歌。波夜夫佐和氣能美淤須比賀泥。万葉三。大伴坂上郎女祭神歌。十六。自物膝折伏。手弱女之押日取懸云々。外宮儀式帳。大物忌无位神主岡成女云々。著明衣木綿手次前垂懸氏天押日蒙氏洗手不干之氏。二所。大神乃朝大御饌。夕大御饌乎。日別齋敬仕奉おぞ見え。大神宮式御裝束。此中。帛意須比八條。長二丈五尺。廣二幅。と見也。度會宮の帛。帛絹。忍比四條。各長二丈五尺。廣二幅。とあり。正中御飾記。り。

綾忍比と云ひ。是らを以思ふ。此名は意曾比と通ひて。弘一幅せあり。襲覆を約免とるれぬ。師におし帯を約免とるありとて。よ引く書どももの趣よかあるべま右の式よ。長二丈五尺。廣二幅。せ有るも。帯此類とハ聞え。同御裝束。御帯。七尺。廣一寸八分。とある也。大く異あま。あり。ま。美夜受比賣。哥ふ須。積せよ。み。儀式帳。蒙りと云。る。あ。ど。帯の類。非。けて其。状。一。幅。よ。は。ま。二。幅。ふ。は。ま。幅。此。隨。る。こと。炳。し。け。て。其。状。一。幅。よ。は。ま。二。幅。ふ。は。ま。幅。此。隨。ふ。い。せ。長。丸。物。ある。を。後。世。の。婦。人。に。被。衣。あ。ど。の。如。く。頭。よ。に。被。り。て。衣。此。上。字。掩。ひ。下。は。欄。まで。垂。る。せ。見。也。其。著。る。を。試。よ。云。は。ら。中央。此。処。を。頭。よ。當。て。蒙。り。左。右。下。ら。び。て。帯。の。端。に。垂。り。て。遣。達。へ。て。腰。よ。ま。と。ひ。前。へ。同。し。て。結。ま。ど。右。よ。引。る。古。書。ど。も。の。趣。を。合。考。す。て。大。概。ハ。知。ら。る。け。て。其。上。代。よ。男。女。共。ふ。人。よ。誰。と。知。ま。じ。と。面。貌。を。隠。

料の服と見えし。今此も妻問の時あまむ。御貌字人
小隠給ふやて著給子依あるべく。はと彼女鳥王此隼別
王此多給ふ織多ふも。己命此が隠びて通ひ給む
料と見ゆ。隠て女を常ふも人よ見ゆ。ことを取て兒を
るを奈良の頃あどふ肌りてハ男の著るあやを隠し。然
て女此古此礼服此如くあゆて神を祭る時あどよのみ
著給るあ依べし。右の如く肌を是字有職家あてかく
し。絹と名くと。或物よ見えたる古の意よ。とくかあ子
依名あ。○伊麻陀登加泥婆とは。結び固ある處を未解
間ふとあ。かの腰より前へ回して。結べ依あ依べし。
泥婆と奴爾と云意あ。此例古歌よ多し。一二擧
む。天智天皇紀の童謡よ。たみのこれ。や子のひもせく。ひ

と子どふ。伊麻拖藤柯禰波。みあはひもとく。此もいまど
解ぬよ此意あり。万葉四よ奉見而未時太爾不更者如年
月所念君ハ。秋立而幾日毛不有者此宿流朝開之風者
手本寒母。この餘よも多加。今云あ不此詞の例を數擧
し。ちて此處ふて語を絶て。次句ふを連け。下此阿遠夜
麻爾云く此處よ係て心得べし。○遠登賣能た處女之ふ
て。沼河比賣を云るれ。○那須夜伊多斗遠た。鳴板戸
をあ。那須を令鳴ふて。即戸を開ことを然言。と聞也。
其は古の戸は多く開き戸ふて。開閉依よ音ある故あ
依べし。源氏物語空蝉卷よ。此御かうしをちしてむやて
あらひあり。或抄ふあらひた。かうしをわろひ音

れ也とあり。此も開こと。万葉五よ。遠等咩良何。佐那周伊
を。おらひせ云。ゆと聞也。多斗乎。意斯比良伎。せあゆ。此の歌詞を取てと免ゆと
見ゆゆよ。佐那須と改とるハ。佐々例此眞ふ通ふ辭あ也。
けて此を。今開を云よは非。交。開。○淤曾夫良比を。押れゆ。
ぬる戸と云意あり。夜を辞あ也。夫良比を。万葉十四よ。多禮曾許能。屋能戸於曾夫流とあ
ゆ夫流也。同きを延て云。ゆゆめ。○和何多。勢禮婆ハ。吾
立有者あ也。多氏礼を延て。多く勢礼と云。立を多く須と云。格ぞ。○比許豆良比を
引あゆ。万葉十三よ。曾朋舟爾網取繫引豆良比云。曰豆
良賓云くと何也。文選西京賦よ。拏攫を。けて押しをかく
夫良比。豆良比せ添て云。ゆゆ。あ。開る戸を押し引と。か

ふかくして強ふ開むと志給ふあ也。師をぶらひひ。おらひ
云。れ。あ。り。今。世。言。よ。も。引。を。引。豆。流。と。云。豆。良。比。を。即。豆。里
を。延。と。ゆ。あ。也。源氏物語若菜上よ。猫のこと。を。綱。いと長
不どよ。夕霧よ。惜みぐ。不よ。も。ひ。逃むせ。ひ。こ。じ。ろ。ふ
あ。じ。ろ。ひ。賜。ハ。後。む。れ。ど。見。ゆ。○阿遠夜麻邇。於青山
あゆ。青く見ゆゆ物ある故ふ。あ。山をかく云あ也。○奴
延波那伎ハ。師云鶴者鳴あ也。和名抄よ。唐韻云。鶴怪鳥也。
漢語抄云。沼江と何也。字鏡よハ。鶴まよ。冠辭考よ。万葉十
ふ。奴延鳥之裏。歎座津五よ。奴延鳥乃能。杼與比居爾云く。
十七。奴要鳥能。守良奈氣之都。追云く。あ。あ。は。彼。が。聲
此悲。え。く。恨。免。し。げ。あ。る。を。人。此。哭泣。ふ。譬。て。お。ら。也。此。二

ば瀧上の淺野此雉聞こそ立動らし。此も雉此鳴を夜の
明るまぞふ云ハ。奴延の鳴ををみ給ふ夜の明るをし
あり然まぞ彼を加茂翁説の如く物思此もよふしと
る由れゆれバこそ雉と雞をよと登与年那久ぞ云る
ふ彼鵲のみを那久といをで那伎と云る言十三ふ隱口
此用格を變とるも意此異ふまバあゆべし
の泊瀬此固ふ左結婚よ吾來れば。棚雲ハ。雪を零來ぬ左
雲ハ。雨を落來ぬ野鳥雉を動む。家鳥可鶏も鳴く。左夜は
明け。此夜を旭ぬ入て且眠む。此戸開らせ。此を此歌ふ依
て詠ハと聞ゆ。右の答哥も今此沼河此賣の御答よせむ
て下ふ。ちて上此。淤須比遠母伊麻陀登加泥婆と云處を。
佐奴都登理云くへおけて心得るし。語此勢を阿遠夜
麻尔と云へ係れ

正さきと意をさ野。其故を板戸を押ぶハ引ハおめ。かふの
お鳥云く子係れゆ。其故を板戸を押ぶハ引ハおめ。かふの
くまて。時遷ゆて得入らぬとふ。太刀緒淤須比を
も未解ぬ間ふ。早夜の明おるを云意をまむれゆ。上よ
引ハゆ万葉十二卷此歌。太刀緒未解は。此意を得て
取れる物ぞ。○宇禮多久母ハ。神武天皇紀よ。慨哉此云干
黎多棄伽夜と見え。万葉八ふ。宇禮多伎也。志許霍公鳥。曉
之裏悲爾云く。十ふ。慨哉四去霍公鳥云く。神樂歌よ。支利
支利須乃。禰多佐宇禮太左也。云くおど何ハ。中昔の物語
多く何ハ。○那久那留登理加。まを上此三鳥を總ていふ。
詞お正。加は後世ふ加那と云意お正。○許能登理母。母を助辭れ

已。此鳥等余。と云むが如し。○宇知夜米許世泥。宇知を打
あ。已。は非。空。宗。よ。打。を。い。へ。り。夜米を令病を約するまで。
打て惱し苦し絶せと云あ。已。凡て麻世字約めて米と云
進も令進あり。浮も令浮あり。屈も令屈あり。鳴こを止
ゆ。深も令深あり。已。あ。ま。ら。を。以。て。心。得。と。鳴。こ。を。止。ま
免むと云うは非。交。皇極天皇紀。哥。よ。騰。奉。預。能。柯。微。乎。は
多伊勢物語。夜も明ば狐。小令食あでくと鶏の。ま。あ。死
小鳴てせあを遣。お。ると云歌を。凡て此様も意も。全此と
似あ。已。今云。此。哥。の。き。お。り。は。絶。あ。で。を。狐。よ。非。出。羽。の
用。ふ。器。の。木。よ。て。さ。し。と。る。又。を。大。木。を。空。よ。く。り。と。依。あ
ど。を。伎。都。と。云。ま。と。宵。鳴。虫。依。雞。は。水。を。胸。を。冷。け。と。云。こ
ぞ。有。ゆ。此。り。依。て。思。ふ。よ。此。雞。は。早。く。鳴。と。る。を。悪。み。て。腐
雞。と。詈。已。夜。明。と。ら。む。ふ。を。彼。伎。都。ふ。う。ち。食。て。胸。を。冷。さ

むと云ふ。さ。已。此。哥。袖。中。抄。よ。ハ。我。家。の。と。あ。る。ふ。て。も。狐
よ。非。ぎ。依。こ。と。灼。し。狐。を。家。よ。近。く。何。依。物。あ。ら。ぬ。む。あ。り
此。を。既。く。屋。代。氏。藤。井。高。尚。あ。ど。よ。告。と。ま。む。参。考。本。ま。と
新。釈。ふ。も。記。さ。ま。と。已。さ。て。予。が。此。説。を。委。く。伊。勢。物。語。梓
弓。よ。記。し。許。世。泥。ハ。乞。望。ふ。意。此。辭。ふ。て。古。歌。ふ。多。し。ま。お
置。と。ゆ。き。万。葉。四。ふ。夢。爾。見。乞。は。と。五。ふ。宇。米。我。波。奈。知。良。須。阿。利。許
曾。れ。ど。形。不。多。く。あ。る。許。曾。と。同。く。て。は。と。二。り。不。通。事。無
有。巨。勢。濃。香。毛。四。ふ。百。夜。乃。長。有。與。宿。鴨。あ。ど。も。詠。み。ま。と
十一。ふ。戀。爲。道。相。與。勿。湯。目。は。と。有。超。名。湯。目。れ。ど。も。詠。て
許。曾。許。世。許。須。と。あ。一。辭。の。轉。れ。る。あ。り。斯。て。泥。も。は。と。乞
望。辭。ふ。て。應。神。天。皇。卷。女。鳥。王。御。歌。ふ。佐。邪。伎。登。良。佐。泥。万
葉。一。よ。名。告。沙。根。ま。と。草。乎。苜。核。あ。ど。れ。不。多。し。ま。あ。万。葉

九ふ。妻依來世尼十四。都麻余之許世彌ふと有。此と
全同じ。○伊斯多布夜。此詞の意ハ。下ふ注せ。催馬樂を
し説。信。よく覚。ま。師云。此を。下。五句を。此。次。の
注。き。び。記。傳。よ。就。て。見。べ。し。師云。此を。下。五句を。此。次。の
歌ふも同く。何。也。は。と。其。終。三。句。を。其。次。に。此。歌。ふ。も。二。所。
朝倉宮。段。の。歌。等。も。見。え。て。書。紀。万。葉。の。哥。み。お。其。歌。此
意。は。お。か。は。ら。び。あ。一。首。此。結。ふ。添。て。云。る。語。れ。り。○
阿麻波勢豆加比。天馳使と聞ゆ。遠飛鳥。宮。段。輕。太子。の
御歌。天飛鳥も使ぞ。鶴。音。の。聞。え。む。時。を。我。名。問。さ。祿。
と有。を。思。ふ。げ。し。其。よ。付。て。思。ふ。よ。上。句。は。伊。曾。伎。飛。や。と
云。り。や。い。そ。ぎ。を。約。絶。て。伊。斯。と。云。り。ま。と。輕。太。子。の。御。哥
よ。阿。麻。陀。牟。と。あ。る。も。天。飛。お。ま。む。多。布。と。も。云。お。

し。然。れ。ど。此。二。句。は。遙。ふ。隔。れ。る。道。の。間。を。も。言。通。ハ。使
を。虚。空。飛。鳥。も。譬。へ。て。云。は。れ。り。や。○許。登。能。ハ。事。之。ふ。て。三
言。一。句。あ。り。次。の。言。よ。連。り。て。一。句。と。を。は。べ。う。ら。び。凡。て
五。言。れ。る。べ。き。を。四。言。三。言。ふ。い。ひ。七。言。あ。は。べ。き。を。六。言
ふ。云。は。れ。ど。上。代。の。哥。よ。い。ひ。七。言。あ。は。べ。き。を。六。言
を。六。言。よ。云。ひ。七。言。を。八。言。九。言。あ。は。べ。き。を。五。言
は。無。こ。と。あ。り。但。し。後。世。ふ。い。も。依。文。字。餘。と。云。例。を。上
代。の。哥。ふ。を。非。る。を。古。学。び。る。人。も。今。風。を。と。む。人。も。共。ふ
其。格。を。あ。ら。む。其。定。ま。れ。る。格。を。己。考。へ。出。せ。る。お。と。有。り。
別。よ。記。せ。り。○今。云。此。師。説。は。字。音。○加。多。理。其。登。母。六。言
仮。字。用。格。ふ。記。さ。れ。と。り。見。る。べ。し。○加。多。理。其。登。母。六。言
語。言。よ。て。母。は。余。と。云。む。が。如。し。凡。て。古。哥。ふ。を。母。て。ふ。助
格。と。て。異。あ。る。○許。遠。婆。を。三。言。是。を。ば。ふ。て。即。此。妻。問。此
事。を。云。お。り。か。れ。ど。此。結。の。五。句。ハ。彼。言。通。ふ。使。の。如。く。

此歌の傳を往て。今此事ハ遙き後世までも。故事の語
言ふぞ爲あむ。と云ふど此意あるべし。○未開戸而は師
云。伊麻陀斗袁比良加受氏を訓べし。阿氣受氏と古言を
驗るよ。必戸は比良久と云ふ。○怒延久佐能。加茂翁説
ふ。此をえ草の女と連りて。れとくとあふる草れ如
死手弱女れ。と云意あふ。且奴を那の通ふ。草のえ
臥を偃と云ふ類あふ。まとのエフスと云夏草れあひ
見。と何師も此説を用ひて。はと或人。草れ芽と云
意ふおぐくや云ふ。此も惡うらま。此説よ依と死。怒延
くて。只草と云も同く見べし。草れ何もあひ靡く物れ
る故よ。怒延草と云。只あはての草れことを云べし。藤を

藤靡と云ぐ如し。はと師説よとらむ。只
草と云ふ。非で怒延。用あるあり。○賣通志阿禮婆。
師云賣は女。志ハ助辭よて。女通。のまむあふ。さて其迹阿
とあま。バ女あれ。バと云ことぞ。凡て那理。那留。那礼。那
と云。辞は。尔阿理。尔阿留。尔阿礼。を約。約とるものぞ。○和
何許。く呂を吾心あふ。○宇良須能登理。敘ハ。師云浦渚之
鳥ぞれ。万葉六よ。内渚。爾波。千鳥妻呼。ととある類を云。
内を今。本よ納と。はと七よ。圓方之湊之渚。鳥浪立。巴妻唱
立。而邊近著毛。十一よ。大海之荒磯之渚。鳥。十七よ。美奈刀
能須登利。あふ多。此等れ渚鳥ハ。一の鳥名。れ如くも聞ゆ
れ。みさごの事ありと云。今此れ歌詞と照して見ま。バ。
あふ洲。ふ在る鳥あはる。し。万葉十四よ。波麻渚。けて是ま

て四句の意を。我丈夫あせせむ。如此も有ほじ死す。女は
おとれまきバ。浦渚ふ立騒ぐ鳥此如く。心の左右ふ騒ぎて。
平和からぬと云れ也。右は引る哥ども此如。其心此不ぞ
は。上よ引る万葉十三此歌の女答歌。隱口乃長谷小園
ふ夜延せは。吾夫のきみと。奥床よ母を睡せり。外床よ父
を寝せり。起立ば。母知ぬべみ出行ば。父知ぬべみ野干玉
此。夜を旭去ぬ幾許も。不念がごとと隱嬌うも。今云此哥の
引て訓れよると少異あるを。畧解よ依まるあり。それを畧
解ある訓を。師の後此考あまバあり。但し吾夫のよみ本
よを大皇才與とありて。師を訓を欠れよ。あまふ準牙
を千蔭が夫才美と此誤と云ふ。不安と云よとせ。○伊麻許
て推度るはし。或説よ。浦洲を心安と云よとせ。○伊麻許
とめと云を。大く非こやあり。

曾波知杼理。阿良米は。今社者千鳥。邇將有れ也。師云。千
鳥は。邇く藝命此大御歌も。波麻都千杼理ととみ賜ひ。
日代宮。段も見えて。古歌よ常多くと。然る鳥あり。然る
鏡よも。和名抄も。此鳥。ちて此は。上の浦渚乃鳥ぞ。我承
の見えぬをいぶるし。ふるれまきば。今あそハ。浦渚鳥あらぬと云。意あはを。歌の
調さ牙云難き故。言哉か牙て千鳥をば云也。此鳥即浦
騷ぐ鳥あること。右よ引る万。葉六の哥此如くあまバあり。○能知波ハ。後者ふて。三言
一句れ也。○那杼理ハ。平和れり。今世此言よ。物の平和あ
はこをを。那杼夜加とも。那杼理とも云。是れ也。其那杼ハ
能杼とも通ひて。能杼加と云も同じあとぞ。万葉十三よ。
吹風も和者。

吹^不ちて歌を調^レを旨^レと^レはる物あ^レ故^レよ。上の知^レ栢理^レ不^レ對^レ
多^レ。那^レ栢理^レと詞^レ字^レ疊^レと^レは物^レれ^レ。契^レ冲^レが。汝^レ鳥^レよあら^レ免^レよ
むと云^レ意^レあり。せ^レ。かく^レま^レむ。此^レ四^レ句^レ此^レ意^レを。今^レあ^レそ逢^レ加^レと
云^レる^レを非^レれ^レ。かく^レま^レむ。此^レ四^レ句^レ此^レ意^レを。今^レあ^レそ逢^レ加^レと
て。如此^レ浦^レ渚^レ此^レ千^レ鳥^レの如^レく。心^レの騷^レぐ^レやも。後^レふ^レを必^レ逢^レ
見^レる。心^レの平^レ和^レと^レは^レき^レを^レ云^レれ^レ。下^レ文^レよ。其^レ夜^レ者^レ不^レ合^レと^レあ
故^レよ。かく^レ心^レ此^レさ^レ已^レば^レし^レあり。ち^レて次^レふ。明^レ日^レ夜^レ為^レ御^レ有^レらむ
合^レと^レあ^レる。あ^レき後^レを平^レ和^レと^レは^レらむ。と云^レよ。何^レと^レま^レり。阿^レ遠^レ
夜^レ麻^レ邇^レ云^レく。と云^レる^レと^レ下^レは。即^レ後^レハ平^レ和^レと^レあ^レらむ。状^レを
と^レ免^レれ^レ。○伊^レ能^レ知^レ波^レ那^レ志^レ勢^レ多^レ麻^レ比^レ曾^レを。命^レ者^レ莫^レ死^レ賜^レひそ
あり。志^レ勢^レハ令^レ死^レを約^レ免^レと^レる言^レあり。水^レ垣^レ宮^レ段^レの歌^レふ。奴
須^レ美^レ斯^レ勢^レ牟^レ登^レ云^レく。とあ^レは^レも。竊^レ將^レ令^レ死^レと^レふて。竊^レよ殺^レさ

むや^レ云^レあ^レと^レれ^レ。垂^レ仁^レ天^レ皇^レ紀^レあ^レど^レよ。弒^レを^レレ^レせ^レツル
と訓^レる^レも是^レあり。弒^レま^レと^レ死^レ字^レの音^レと
混^レす。但^レし今^レ此^レを。殺^レ免^レ意^レよ^レを非^レび。自^レ死^レる^レを云^レあ^レま^レせ。
古^レ言^レふ^レを。立^レを多^レく。須^レ行^レを由^レ加^レ須^レあ^レと云^レ例^レよ^レて。令^レ死^レと
は云^レれ^レ。ち^レて命^レ死^レぬ^レと云^レは。何^レと^レや聞^レか^レうぬ^レあ^レく。ち^レに
え。万^レ葉^レ集^レよ^レも。あ^レく。儲^レ加^レく歌^レする^レ意^レ二^レお聞^レ也。一^レは。後
か^レしよ^レ例^レあ^レり。儲^レ加^レく歌^レする^レ意^レ二^レお聞^レ也。一^レは。後
お^レを必^レ逢^レ見^レ法^レき^レち^レど^レよ。其^レ時^レま^レて死^レお^レび長^レら^レず^レて。待^レと
る^レと云^レあ^レり。二^レお^レは。今^レ夜^レ逢^レ見^レぬ^レこ^レを^レ深^レく慨^レみ^レて。戀^レ
死^レ給^レふ^レ那^レや云^レれ^レ。初^レの意^レよ見^レる^レ時^レを。後^レと云^レこ^レを。程
夜^レのこ^レを。能^レ知^レ波^レと云^レる^レれ^レ。明^レ日^レ夜^レ為^レ御^レ合^レと^レあ^レる^レを
以^レ見^レま^レむ。後^レ意^レあ^レる^レべ^レし。凡^レて古^レ事^レ記^レ中^レ此^レ哥^レを^レも。お延^レ佳
が附^レする^レ傍^レ注^レれ^レと^レ古^レの意^レ言^レを^レあ^レらぬ^レも。此^レ
あ^レま^レば。論^レふ^レも足^レらぬ^レこ^レを^レグ^レち^レあり^レう^レし。○阿^レ遠^レ夜

麻邇比賀迦久良婆^{ハカカクラバ}於青山日之隱者^{アケヤマヒノカクレモノ}也。日此暮^{ヒコノクシ}るを云ふ也。迦久禮婆^{カクレイバ}と云はききを。迦久良婆^{カクラバ}と云は古言^{コトコト}也。一格^{ヒツ}ハ。近飛鳥宮段^{チカトビノミヤノセグ}大御歌^{オホミコウタ}也。美夜麻賀久理氏^{ミヤマカクリノウヂ}と云は格^{ヒツ}ハ。此格^{ヒツ}ハ。加久良^{カクラ}羊^ヤ加久理^{カクリ}。陰陽式^{インヤウシキ}難祭^{ナニマツリ}文^{フミ}也。留里^{ルリ}加久良^{カクラ}婆^バとあるも古言^{コトコト}也。依^ヨま^マる^ル也。○奴婆多麻能^{ヌバタマノ}ハ。夜と云む^トての枕言^{マクシノコトバ}也。冠辭考^{カウジコウ}云。万葉五^{マンヤクイノ}ノ。奴波多麻能^{ヌハタマノ}用流能伊昧仁^{ルネイミニ}云。十二^{ジュニ}ノ。野干王^{ノカンオウ}之夜^ノ渡月^{ワタツキ}之云。十^{ジュウ}ノ。鳥王之夜^{トリノヨ}霧隱^{キリカクレ}云。カ^カ多^タ。ま^マと四^シノ。黒王^{クロオウ}之玄髮山^{ソノヘノ}乎云。此^{コノ}を黒^{クロ}と扱^{アツ}ぐ^グけ^ケぬ^ヌり^リ。か^カく^ク連^{レン}と^トる^ル哥^カ。カ^カ多^タ十四^{ジュウシ}ノ。夜干王^{ノカンオウ}能夢^{ノイメ}所見^{ノミ}乍^ツ。十七^{ジュウシチ}ノ。奴婆多麻能^{ヌバタマノ}都奇爾^{ツチケル}年^{トシ}加比^{カヒ}氏^{ウヂ}云。奴

婆多麻能^{ヌバタマノ}伊毛^{イモ}我保須倍久^{エホスヘク}云。カ^カ多^タ何^{ナニ}也。奴婆王^{ヌバオウ}之夜^ノと云て月^{ツキ}ノ冠^{カウ}し^シ。カ^カ多^タ黒^{クロ}と^トも^モ夢^{ユメ}と^トも^モ連^{レン}け^ケ。ま^マと伊^イノ一^{イツ}音^ネも^モ加^カけて^ケ。妹^{イモ}と^トも^モ連^{レン}け^ケと^トり^リ。カ^カ多^タの年^{トシ}と^トも^モ云^クと^トり^リ。轉^{マシ}り^リ。て^テ。璞^ホの月^{ツキ}日^ヒ荒田^{アラタ}麻^マ之^ノ全^{ゼン}夜^ヤ毛^モ抑^{ヨメ}奴婆王^{ヌバオウ}云^ク辭^ジハ私^シ記^キ也。不落^{フツ}也^也。扱^{アツ}ぐ^グけ^ケと^トる^ル類^{ルイ}也^也。抑^{ヨメ}奴婆王^{ヌバオウ}云^ク辭^ジハ私^シ記^キ也。鳥扇^{トリノアビ}之^ノ實^シ也^也。其色^{ソノイロ}黒^{クロ}以^{ヨリ}喻^ヨ之^ノと云^クる^ルを宜^{ヨシ}と^トり^リ。其^{ソノ}を和名^{ワナ}抄^{シウ}み^ミ。射干^{セカン}一名^{イツナヒト}鳥扇^{トリノアビ}和名^{ワナ}加良^{カラ}須安^{スアン}布木^{フキ}也^也。然^{シカ}れ^レカ^カ射干王^{セカンオウ}と書^クて正字^{テイジ}也^也。夜干王^{ノカンオウ}野干王^{ノカンオウ}也^也。書^クゆ^ユカ^カ音^ネを借^カと^トる^ル也^也。射干^{セカン}此^{コノ}家^ケハ黒^{クロ}き^キ王^{オウ}の如^ニく^クも^モ野^ノは生^ナる^ル物^{モノ}也^也。我^ガ因^{イン}は野^ノ眞^{マコト}王^{オウ}と云^クる^ルは^ハと有^リ也^也。猶^{ナカ}委^カく^クカ^カ冠^{カウ}辭^ジ考^{コウ}を^ヲ見^ミて^テ知^チべ^ベし^シ。ま^マと師^シ云^ク冠^{カウ}辭^ジ考^{コウ}也^也。此^{コノ}を野^ノ眞^{マコト}王^{オウ}也^也。有^リは^ハい^イの^ノ也^也。或^シ説^{セツ}よ^ヨ縫^{ヌイ}葉^{エフ}と^ト云^クひ^ヒま^マと奴^ヌを^ヲ黒^{クロ}を^ヲ云^クて^テ黒^{クロ}羽^ハ王^{オウ}あり^リれ^レと^ト云^クる^ルは^ハ惡^{アク}し^シ。カ^カは^ハ或^シ人^ニ説^{セツ}よ^ヨ鳥扇^{トリノアビ}の葉^{エフ}ハ羽^ハ也^也。

已固はらぬ方よ云を賤むるありやをらうちて沫雪よ
ある方よ云を美るあり今此を美て云已。ちて沫雪よ
ゆ連く意は脆くて固のらぬ方。歌の意を柔らあるを美
ゆ方れ已。ちて上の腕ハ男神此腕此は女神此胸れゆ。男
神此腕を以て。女神此胸をと云意ぞ。御哥よを胸字と先
よ云てさて白き腕そどくきせ有て其意あ。曾陀多
るあと字知はし。此処を九せびを混ひぬべし。○曾陀多
伎は俗小曾と叩くと云こせれ已。凡て事を緩く和や
曾登とも曾呂理登せも云をみあ此曾あり此句を契冲
を曾は添とる辞よてあ叩れりぬるをそれり。を
云ぐ如しといひ師を背抱れり云云或ハ漢籍遊仙窟
陀多伎を手抱ありと云説もあり皆よろし。漢籍遊仙窟
小拍搦婢房間と云ゆもよく似ぬゆあとぞ。○多々伎麻
那賀理とを胸を叩ちて交り抱を云ふ。麻那賀理を。麻奴

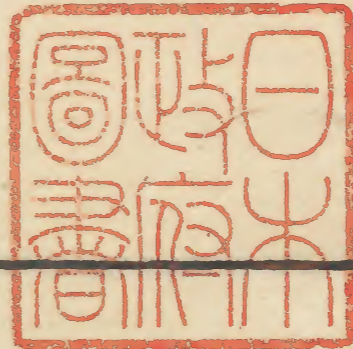
加流あり少師の云まし。然も有はし。奴と那を常よ通
音便。麻奴加流とは。麻奴久を延ある言。麻奴久を拱と同
言。古麻奴久を組貫あ已。ちて今を。其古麻奴伎の古を省
死伎を延て麻那賀理と云ふて互ふ手を差交し抱く
由あり。かの拱を己が左や右の手を組貫あり。此を女手
も言の意。彼繼體天皇紀ある御歌よ。多々企阿藏播梨と
ゆゆ句。即ち此言ふ當れゆ。左ふ引く。そ此阿藏播梨も糾
あまを此と同意あ已。○麻多麻傳は眞玉手あ已。○多麻
傳佐斯麻伎ハ玉手差纏あり。玉手とを美死手を不死て
云。手玉とて手よも玉を飾まを然る。佐斯ハ彼方牙差や
手やも尻べるまど猶さよハ非じ。

あふ。麻伎を。枕ふ。びる。あ。と。あ。也。妹之手。將纏あ。ぎ。多
く。詠み。ま。と。手枕纏とも。枕ふ纏とも。枕纏とも。麻久良加
牟とめ云也。万葉五よ。は。と。ま。で。の。王手さ。し。う。牙。さ。ね。し
の。玉手。け。し。更。牙。と。ひ。八。ふ。天。飛。や。領。巾。の。と。あ。死。眞。玉。手
も。寐。て。あ。ぐ。も。と。詠。り。○。毛。く。那。賀。爾。ハ。契。冲。説。ふ。股。長。よ
あ。也。云。也。其。を。足。を。伸。て。も。あ。ら。の。ふ。寐。る。は。了。也。○
伊波那佐牟遠ハ。寐者將宿よ。て。遠ハ。毛能遠と云意の辭
れ。次。あ。る。須。世。理。毘。賣。の。御。歌。ふ。伊。遠。斯。那。世。也。も。あ。也。
万葉二よ。奥波來依荒磯乎色妙乃。枕等卷而奈世流君香
聞。奈世流を寐。五よ。夜周伊。斯奈佐農。安寐不令寐。あ。十四
ふ。伊利伎氏奈佐禰。入來而寐。十七よ。吾乎麻都等。奈須良

牟妹乎。奈須良牟ハ。十九よ。安寝不令宿君乎。奈夜麻勢ま
あ。安。宿。勿。令。寢。あ。ま。ら。を。合。て。心。得。る。し。寐。て。ふ。言。は。那。奴
泥と活くれ也。然るもその奴泥を常ふ云也。あ。よ。と。く。通
那。佐。牟。あ。ぎ。云。牙。バ。は。と。伊。と。云。も。寐。こ。や。れ。る。戎。寐。乎。安
心。得。ふ。く。き。が。如。し。宿。宿。毛。不。寢。あ。ぎ。重。ね。て。云。も。常。あ。也。上。よ。引。る。繼。躰
我。入。坐。し。而。と。也。也。あ。ま。ぎ。め。し。て。魔。俱。囉。囀。利。於。万。ど。也。
して。い。も。ぎ。手。を。我。よ。は。り。あ。死。也。が。手。を。い。も。は。り。し
あ。ま。さ。死。ば。ら。と。き。の。さ。は。り。あ。く。く。し。ろ。う。ま。い。ね。あ
と。ふ。と。有。る。十。三。句。此。の。哥。比。阿。佐。比。能。云。く。よ。め。此。ま。で
此。さ。は。や。と。く。似。と。め。但。し。彼。を。男。の。御。哥。よ。て。自。然。為。給
ふ。由。あ。り。此。を。女。比。哥。ふ。て。男。比。然。為。と。る。を。む。由。あ。り。
○。阿。夜。爾。三。言。此。句。あ。也。此。言。を。應。神。天。皇。卷。建。内。宿。禰。歌。
雄。畧。天。皇。卷。三。重。姝。歌。天。皇。大。御。歌。あ。ぎ。よ。も。あ。也。万。葉。ふ

め。阿夜爾恐カシユき。阿夜爾戀コヒし死シあど甚イト多し。十四卷シヨウよた。安ヤ也爾阿夜爾也。重ヘ祕ヒても云フ也。此言の意イ上ウ此阿夜詞志シ也。古泥神コニ此コ処ト注ツり。第四段ダイ也。傳見ツ。○那古斐ナコヒ伎許志キコシを。勿戀ナ詔ミコトノコトひそと云フむが如ニし。仁ニ德天皇ニホキミ卷。八田若郎女御歌ヤハタニハハシノメノウタ。天皇ニホキミし宜ヨシを伎許佐婆キコサバ。天皇ニホキミ大御歌オホミノウタ。大オホろくふ伎許佐怒キコサノ。万葉十一マンヤクジウ。狗上イヌノカミ此鳥籠山コトノカミ。あるいさや河カハいさとを才許勢サキコセ余名告ナノナラひあ。十二ジュウニ。空言ソラゴトも相アハむと令聞戀キコヒの各種爾ナグサニ。万葉マンヤクよ。此言コトあまらの伎許須キコシみあ。詔ミコトノコト云フあやふ也。此コト人ヒトの言コトて。我ワガよ令聞意キコヒとめ云フ。詠ウタ也。然シカれども其言コト人を等ヒトみて云フときあらで云フ云フぬ。言コトあり。右ミダ此哥ウタどもあ多オホ心得ココロべし。ま中昔ナカノコトの物語モノトコト文モノれどふ申ウタガハしと云フは交マシ聞キコ也と云フること常多トコトし。そまも等ヒトむ人ヒトよ申ウタガハをのみ云フり。さまむ古言コトの伎許須キコシと

て。おのひざま表ウラ裏ウラ此コトぬがひあゆ。今イマの人ヒトを古言コト雅言ニギハヤクの用ヨウひげまを知らシらばきあはとときこをコトも一ヒトよあくる。得エまよ人の己ミふ向ムカひて言コトせ云フあ。ちて此コトを常トコト此格コトあらとをコトきこゆと云フあど大オホく非ヒあり。ちて此コトを常トコト此格コトあらば。那古斐ナコヒ伎許志キコシ曾ソノあゆるコトばきを。下シタ此曾ソノてふ辭コトれきも。古歌コトふは例多タし。然シカるを此コト近チカ世ヨの哥ウタどもふた下の曾ソノを。甚シく非ヒあり。那ナはうれラ斯カクて右ミダ二句ニクは。甚シく吾ワガを戀コヒて。云フは。ハ通ツえぬ言コトぞ。斯カクて右ミダ二句ニクは。甚シく吾ワガを戀コヒて。ちのみあ詔ミコトノコトひそを。慰なぐさ免マフとほものれぬ。上ウ句クよ。命者ノミノト勿ナ死シ也。○其夜者ソノヨハ。あは上ウよ男神ノカミ也。佐用婆サヨハ比爾ヒル在アリ立志コトをコトみ給タマする夜ヨを指サスふを非ヒ交マシ。男神ノカミ此コトさまばひよ云フと詠ウタこぬる由ユあまマババああよ其夜ソノヨと云フは。雉ニ鶏トリの鳴ナて。既スデよ明アカの夜ヨあるべし。と思オモふ人ヒトも有アむ。さまど女神ノカミ也。夜ヨハ出デるむと云フは。給タマする其夜ソノヨ不フ合アとあらむ。必カナラ又マタその不フ合ア所トコロ以ヨを云フは。きよ。何ナニの障サマれる由ユを云フで。ふと其夜ソノヨ不フ合ア。



と云てはこと ○明日夜久流比能用を訓はし。其由者

足るべし。今云第八十三段 此即用波伊傳那牟とある夜

刃也。○爲御合矣。美阿比志賜伎と訓べし。万葉十み八

世々ゆ。乏嫌人知ル也。苦思牙。せをるも。此等此
故事を思ふる。あゆべし。但苦字。今本は告と誤ま也。

○門人曾我常昌。高岡彝。たよび越原正蒿ら云ふ。此巻を

上木して。世小弘免むと勤む者也。美濃。因惠那郡。坂下村

小住免。吉村重時。まと同郡田瀬村。小家を。丹羽正徳。

は。加茂郡。神戸比里人。神戸正邦と三人れる。彼初巻

よ。次くを。勞るまし。人々此力も添ひて。かく刊本とは

成る也。

